2019年度
青山学院大学
ボランティアセンター活動報告書

AOYAMA GAKUIN UNIVERSITY

2019 年度活動ダイジェスト

ボランティア学生団体合同説明会

新歓イベントの一環として、学内ボランティア団体の合同による活動説明会を実施しました。
活動に興味のある団体のブースへ新入生が訪れ、どの団体も説明に熱が入りました。
（詳しくは p.14）

Roote 合宿研修

学生スタッフの連帯感とボランティア企画・運営力の向上を目的に学生スタッフ Roote の合宿研修を行いました。新スタッフも加え、ボランティア入門講座やこれまでの活動の振り返り、今年度の活動計画などをスタッフ全員で話し合いました。
（詳しくは p.47）

ボランティアカフェ

「ボランティアには興味があるけれど、なかなか参加の一歩が踏み出せない。」そんな学生向けに、社会課題に取り組む NPO 団体や個人の方に活動について語ってもらう企画を実施しました。ランチタイムに気軽に参加でき、様々な分野で活躍する方のお話を聞くことができました。
(詳しくは p.18)

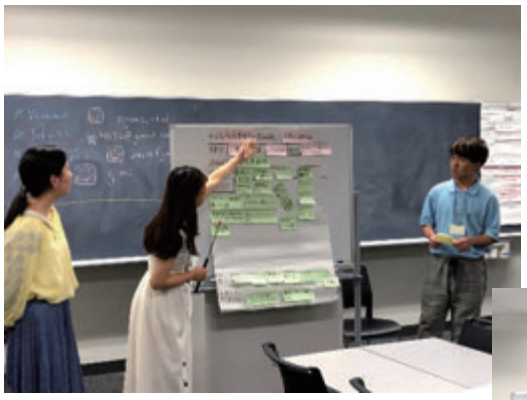
災害救援ボランティア養成講座

災害時に活躍できるボランティアリーダーの育成を目的に渋谷区や警察、消防などによる防災講和、防災館での体験学習を行う講座を２日間にかけて実施しました。
台風による被害報道の最中でもあり、実践を視野に入れた参加者が多くいました。
（詳しくは p.33）

オープンキャンパス（青山･相模原キャンパス）

大学オープンキャンパス共通企画として青山・相模原両キャンパスにて展示を実施。
受験生に対し、青学生が実践するボランティア活動を紹介し、ボランティアの魅力や多様性を感じてもらいました。
（詳しくは p.16）

国際協力プランナー入門



途上国問題について、講義やグループワーク、ロールプレイングを通して学び、２日間をかけて自分たちの手でアクションプランをまとめるワークショップ型研修を実施。受講者には修了証が授与されました。
（詳しくは p.17）

塩竈市浦戸諸島夏まつりボランティア

本学と連携協定にある宮城県塩竈市と連携したボランティア活動を実施しました。塩竈市浦戸諸島で開催される夏まつりの運営補助として、お祭りの準備や片付けの他、本学のブースを設け、島民の方々にも楽しんでもらえるよう会場を盛り上げました。
（詳しくは p.31）

塩竈市学習支援ボランティア

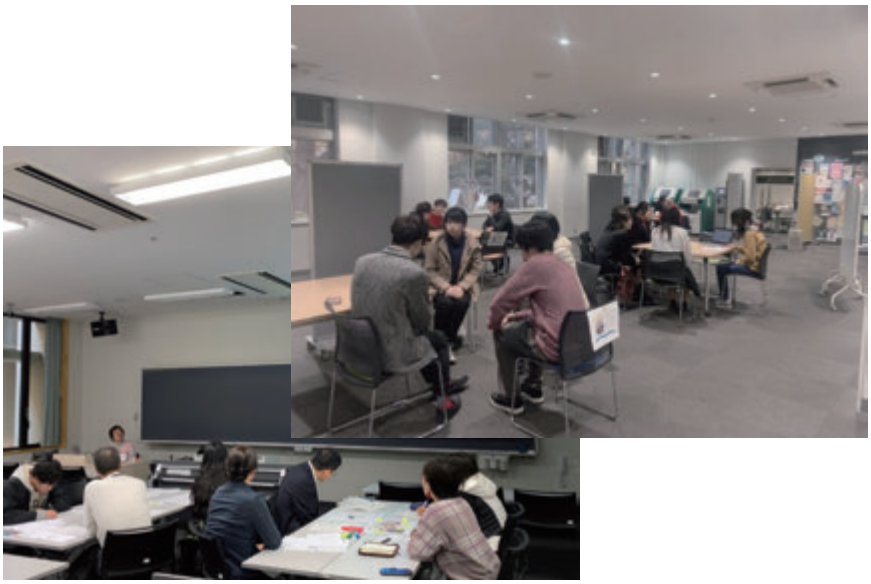
宮城県塩竈市内の小学校にて、授業補助を行った他、放課後に開催された塩竈市アフタースクール事業「わくわく遊び隊」にて、学生が考えたカラダを動かしたゲームで盛り上がりました。
（詳しくは p.32）

相模原市災害ボランティア派遣

令和元年東日本台風がもたらした神奈川県相模原市への被害に対し、相模原市社会福祉協議会の協力のもと災害ボランティア活動を行いました。
また、学内では学生・職員の有志による募金活動も行われました。
（詳しくは p.41）

障害者週間

国が定める「障害者週間」に合わせ、障害平等研修やユニバーサルマナー検定３級、ヒューマンライブラリーや映画上映会などの障害理解を深める企画を学内で実施しました。
（詳しくはp.19）



こどもテーブル@アオガク

本学を拠点とした渋谷区こどもテーブル活動として、地域の小学生を大学に招き、学生の考案したゲームで遊び、食堂でランチを囲んで交流しました。
（詳しくはp.21）

秋田県仙北市冬季交流ボランティア

毎年恒例となった秋田県仙北市での冬季交流プログラム。雪まつりの設営準備や、一人暮らし高齢者宅での除雪作業を行いました。仙北市の方々の温かなおもてなしに触れ、学生にとって充実した経験となりました。
（詳しくはp.35）

2019 年度 青山学院大学ボランティアセンター活動報告書

目　次

巻頭ダイジェスト …… 1
1. 刊行に寄せて …… 8
2. ボランティアセンターについて …… 11
3. ボランティアセンター事業・活動報告
3.1 ボランティアセンター主催事業
ボランティアオリエンテーション（青山・相模原）…… 13
ボランティア学生団体合同説明会（青山・相模原）…… 14
防災ボランティア講習…… 15
オープンキャンパス（青山・相模原）…… 16
国際協力プランナー入門…… 17
ボラカフェ（青山・相模原）…… 18
障害者週間…… 19
こどもテーブル@アオガク…… 21
教職員ボランティア活動補助プログラム…… 22
ボランティア・プロジェクト・サポート制度
【スタートアップコース】
ザ・ボディショップ×エシカル協会×青学 …… 23
タイ北部オーガニックコーヒープロジェクト…… 25
【ステップアップコース】
ペットボトル灯篭プロジェクト…… 26
子どもの意識改革プロジェクト…… 27
相馬市立中村第二中学校での夏休み学習プロジェクト…… 28
3.2 共催・協力事業
認知症サポーター養成講座（青山・相模原）…… 29
全国 NGO 海外ボランティア合同説明会 …… 30
『夏の体験ボランティア』キャンペーン 2019 ガイダンス説明会 …… 30
外国人おもてなし語学ボランティア養成講座…… 30
塩竈市浦戸諸島夏まつりボランティア…… 31
塩竈市学習支援ボランティア…… 32
渋谷区総合防災訓練　警視庁防災ボランティア…… 32
総社市英語特区ボランティア…… 33
災害救援ボランティア養成講座…… 33
学生向け子どもの居場所づくりセミナー…… 34
外国にルーツを持つ子どもの学習支援について知ろう…… 34
仙北市冬季交流ボランティア…… 35
渋谷区こどもテーブル…… 37
3.3 AOYAMA VISION 推進事業
サービス・ラーニングパイロットプロジェクトへの協力…… 38
3.4 その他
< 災害対応について >
ボランティアセンターにおける災害発生時の対応基準…… 40

令和元年東日本台風対応…… 41
< 外部研究への参加 >
日本福祉教育・ボランティア学習学会参加…… 45
<アンケート>
ボランティア活動に関するアンケート…… 46
4. 学生スタッフ企画プログラム
学生スタッフ Roote について …… 47
活動プログラム
陸前高田（コミュニティ活性支援、福祉支援）…… 48
熊本（地域活性化支援）…… 50
防災（地域防災）…… 52
福祉（障がい者支援、環境啓発）…… 54
食品ロス（啓発活動）…… 56
難民（難民支援）…… 59
インドネシア（環境活動）…… 60
フィリピン（教育支援活動）…… 61
ネパール…… 62
5. 資料
5.1 ボランティアセンター利用状況 …… 63
5.2 ボランティアセンター規定 …… 72
5.3 ボランティアセンタースタッフ一覧 …… 78
5.4 ボランティアセンターを支えてくださった皆さま …… 80
提携・協力団体…… 80
寄付・助成をいただいた皆様…… 81
その他、お世話になった皆様…… 81

1. 刊行に寄せて

センター長挨拶

ボランティアセンターは誰のために

ボランティアセンター長　鈴 木　眞 理

青山学院大学の中にボランティアセンターが存在することが当たり前のことになってきているようである。喜ばしいことであろう。それなりの役割を担い、「地の塩、世の光」を標榜する大学としての面目躍如ということなのであろう。

でも、そのことに満足していいのだろうか。存在することが当たり前のものになっている、ということは、組織の一部になってきたということでもある。それは喜ばしいことなのであろうか。おかしなことを言っていると思われようが、このことはボランティアセンターのありように関わる重要なことであろう。

組織の一部になると、常に組織全体に目がいく。目の前の人・ことへの関心がそがれることにもなる。計画や報告などの書類を作ることに精力がそがれ、成果をあげることに汲々としてしまう。新たな挑戦はできにくくなる。そのために、仲間うちで物事をすすめ、異質なものを排除し、時には、組織のために自己犠牲を払うようにもなる。思考が内向きになってしまうし、組織の中での評価を気にするようになり、さまざまな理由をつけ自身の地位の安定と処遇を求める、いや、自分はそうは思わないのだけれど組織からの要請だという詭弁も用いられて。しかし、これらは、ボランティア活動といわれるものの考え方の対極にあるものなのだろう。

そういう状況にどう対処できるか。ボランティアセンター関係者の人間性が問われるということなのだろう。ボランティアセンターは、関係者自身のためにあるわけではない。

そもそも組織に庇護された安全志向のボランティア活動などあるべくもないし、規格化された「活動」・予定調和的な「活動」は、ボランティア活動とはいえない異質な活動として考えられるのであろう。ボランティアセンターは誰のために存在するのか、折にふれて考えることが求められよう。

2019 年度の動向と今後の課題

開設から 4 年目を迎えたボランティアセンターでは、青山キャンパスに 4 名、相模原キャンパスに 1 名、それぞれ得意分野をもったコーディネーターを配置し、《青学らしい》サーバント・リーダー育成に向けて新たな取組みを行いました。

まず、これまでセンターのボランティア活動企画の多くを担ってきた学生スタッフ「Roote」については、新たに運営体制の見直しや合宿研修による企画スキルの向上をはかっています。東日本大震災直後から始まった東北地域での各種支援活動もいよいよ終息を迎え、今後、青学生の／青学生による／青学生のための学生ボランティアプログラムをどのように展開していくか、あらためて問われています（本報告書 46 頁）。

これを受けてセンターでは「ボランティアには興味があるけれど、なかなか一歩が踏み出せない」学生に向けたサポートの拡充を始めました。その成果は社会課題への取組みについて気軽にお話を聞くことができる「ボランティアカフェ」開催（17 頁）や、コーディネーターが伴走して新たなプロジェクトを作っていくボランティア・プロジェクト・サポート制度「スタートアップコース」等のかたちで具体化しています（23 頁）。

また 2019 年度には、青山・相模原両キャンパス周辺の機関や地域の団体との協働により、キャ

ンパスに近いエリアの小学生を大学に迎えての「こどもテーブル @ アオガク」（21 頁）をはじめ、「認知症サポーター養成講座」（29 頁）、「学生向け子どもの居場所づくりセミナー」「外国にルーツを持つ子どもの学習支援について知ろう」（34 頁）等の各種研修・イベントを新規に実施しました。今後も各キャンパスの特性や地域社会との連携を活かした活動の発展が期待されます。

さらに AOYAMA VISION 推進事業に関しては、サービス・ラーニングパイロットプロジェクトへの協力を行い、NPO や地域団体での学外実習を組み込んだ科目の試行運営やその教育的／社会的効果の評価にも取り組みました（39 頁）。ボランティアセンターとして、学生の社会貢献活動をより広く支援してくために、課外活動であるボランティアと正課として教育目標を持ったサービス・ラーニングの相乗効果をどのように高めていけるか、今後の大きな挑戦になりそうです。

これらは 2019 年度にセンターが実施した事業のごく一部に過ぎませんが、大きな動向として、ボランティアへの関心の高い一部の学生にとどまらず、より幅広い学生へのボトムアップ型のサポートが重視されつつあります。今後もセンターの事業へのご理解とご協力をお願い申し上げます

ボランティアコーディネーター紹介

青山キャンパス

ボランティアコーディネーター　佐藤　亜希

一人でも多くの学生にボランティア活動に参加してもらい、住みよい社会を築く担い手となって欲しい、そんな想いで 2019 年度は「国際協力プランナー入門」や「災害救援ボランティア講座」、ランチイベント「ボランティア・カフェ」などを担当しました。

ボランティアコーディネーター　秋元　みどり

サービス・ラーニングの実践を発展させていくための基盤形成に取り組んでいます。
新しさと古さとが交わり、多様性がますます広がる渋谷の地域で、学生が専門領域や個々の文化を越境して学ぶおもしろさに出会えることを目指しています。

ボランティアコーディネーター　島﨑　由宇

認知症サポーター養成講座、障害者週間など福祉領域のボランティア業務を主に担当しました。福祉分野に関心のある学生を掘り起こし、地域の現場と繋がることで新しい協働の形が生み出せるよう力を注いで参りたいと思います。

学生生活部学生生活課
ボランティアコーディネーター　中尾　匠吾

ボランティアやサービス・ラーニングを大学全体の戦略・方針と紐づける側面支援を担当しています。個別でも「こどもテーブル@アオガク」等の企画を通じ、センターが大学の社会的責任を果たす主体としての機能を高めていきたいと考えています。

相模原キャンパス

ボランティアコーディネーター　三神　憲一

両キャンパス共通事業、相模原キャンパスで実施される企画やセンター運営全般を担っています。2019 年度は高齢者福祉、防災、地域学習支援等の講座のほか、災害ボランティア派遣やサービス・ラーニング科目のサポートを行いました。

2019 年度学生スタッフ Roote 代表挨拶

国際政治経済学部国際政治学科
ヤマウチ　恵凜

大学に入るまで、体育会系の活動しかしたことがありませんでした。自分の闘争心を満たすためにひたすらスポーツに打ち込んできましたが、何か社会のためにできることがあるといいかなと思い、大学でのボランティア活動は入学前から決めていることでした。正直に言えば最初の頃は、少し退屈になるかなとも思っていました（笑）。全くそんなことはありませんでしたが、いわゆる「あっというまに」という訳でもなく、良くも悪くも濃密な 3 年間だったと思います。

3 年生の 1 年間は代表としてのみ活動していましたが、その土台は 1・2 年生の際に行っていたインドネシアプログラムの活動にあります。ボランティアの難しさを、身をもって 2 年間かけて経験しました。大変なのは、水道水が飲めないことでも、計画通り物事が進まないことでもありません。一番大変なのは、心持ちが正しいかを常に確認することです。自分たちがやっている活動はボランティアとして意義のあるものなのか、それとも単に自己満足のために行っていることなのか。この細いラインを踏んでしまうか否かを、はっきり見えていないプログラムは非常に危険です。私も同期のスタッフと一緒に協力しながら、いつも調整していたように思います。ボランティアというと、パッションをもって盛り上がっているイメージがありがちですが、本当はいかに冷静さと分析能力、課題発見・解決が大事なことかということです。これは実際に自ら行動しないと分からないことで、私はとても大事な経験が出来たなと思います。

Roote スタッフ一同、精一杯活動していますが、言っても学生団体。たくさんの方々のご協力がなければ、何も成立しません。この場をもって、お力を貸してくださった全ての方々に感謝申し上げます。

Roote はこれからも、多角的なボランティア活動を行う団体としてさらに成長していきたいと思います。自らも学び、成長していくとともに、社会にも貢献していきますので、これからもどうぞよろしくお願いいたします。

2. ボランティアセンターについて

青山学院大学ボランティアセンターについて

青山学院大学ボランティアセンターは青山学院のスクール・モットーである「地の塩、世の光」を体現する人物、サーバント・リーダーの育成に向けて、実践するボランティア活動を促進させる目的で設立しました。また、2018 年 4 月には相模原キャンパスにもセンターを開設し、両キャンパスでのボランティア活動支援の基盤が整いました。

■設　立　2016 年 10 月 1 日設立

■所在地　青山学院大学青山キャンパス 1 号館 1 階
　　青山学院大学相模原キャンパス F 棟 2 階

■センターミッション
①学生・教職員の自発的な社会貢献活動への参画を促進すること
②大学の持つ専門性や強みを活用してボランティア活動の社会的効果を向上すること
③社会貢献活動への参加にともなう教育的効果を向上させること

■事業内容
A. 活動支援分野（直接的支援）
（1）ボランティアへの参画機会の提供
（2）ボランティア活動の実施促進
（3）ボランティア活動に参加する学生・団体の能力強化

B. 環境整備分野（間接的支援）
（1）ボランティア活動に関する学内外の専門家・関連団体との連携の促進
（2）ボランティア活動の社会的・教育的効果の評価と勧告
（3）ボランティア活動をめぐる社会的価値の創出と発信

3. ボランティアセンター事業

3.1 ボランティアセンター主催事業

事 業 名	ボランティアセンターオリエンテーション（青山）
日　　時	2019 年 4 月 3 日（水）～ 5 日（金）　昼の部 12:30 ～　夕の部 17：00 ～
会　　場	１号館１階　ボランティアセンター（青山キャンパス）
参加者数	4 月 3 日　27 名 4 月 4 日　59 名 4 月 5 日　71 名　　総計　　157 名
内　　容	ボランティアセンターの利用方法や一部ボランティア紹介をし、サービス･ラーニング科目の紹介を行う。また、学生スタッフによるボランティア体験談と、サービス・ラーニング科目履修者による体験談を話してもらった。
成　　果	昨年度同様参加者は多く、最終日の昼はセンターに人が溢れるほどの人数となった。オリエンテーション後も残って Roote の活動や、ボランティア・プロジェクト・サポート制度、サービスラーニング科目、ボランティア合同説明会について質問する学生が多く、ボランティア活動に関心のある学生と繋がる機会となった。

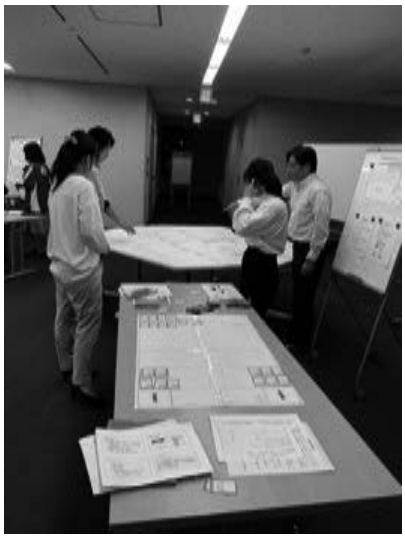
事 業 名	ボランティアセンターオリエンテーション（相模原）
日　　時	2019 年 4 月 3 日（水）～ 5 日（金）　昼の部 12:30 ～　夕の部 17：00 ～
会　　場	F 棟 2 階　グローバル・ラーニング・コモンズ（相模原キャンパス）
参加者数	4 月 3 日 19 名 4 月 4 日 34 名 4 月 5 日 44 名　　総計　　97 名

内　　容	新入生を対象にボランティアセンターの利用方法やイベント・セミナー情報、サービス･ラーニング科目、相模原キャンパスで活動しているボランティアサークルなどを紹介した。
成　　果	・参加者はボランティア経験者が多く、関心の高さがうかがえた。 ・1 年生はサークルなどでのボランティア活動を希望する学生が多い印象を持った。 ・Ｆ棟 205 の場所が分からず、迷ってしまう学生がいた

事 業 名	ボランティア学生団体合同説明会（青山）
日　　時	2019 年 4 月 11 日（木）17：40 ～ 20：00
会　　場	青山キャンパス　17411 教室
参加者数	5 限　55 名 6 限　21 名 合計　76 名
内　　容	新歓イベントの一環として学内の学生ボランティア団体 8 団体の活動紹介を行った。会場には個別ブースを設け、個別相談会として興味のある団体と直接相談できるようにした。 昨年度より参加団体が増えたため、２部制とし発表団体を分けて行う。 参加団体：第一部　Roote、青山子ども会、SHANTI SHANTI 第二部　Youth for Ofunato、きすあに、僕らの夏休み Project、TsunAGU ボランティア愛好会、アイセック
成　　果	個別相談会では Roote、SHANTI SHANTI、アイセックのブースに人が多く集まったが、その他団体ブースにも参加者が訪れ、全体的に盛り上がりを見せていた。独自に新歓説明会を学内で実施出来ない有志団体からは、学内での貴重な広報の機会になったという声をもらえた。

事 業 名	学生ボランティア団体合同説明会（相模原）
日　　時	2019 年 4 月 12 日（金）17：30 ～ 20：00
会　　場	D215 教室（相模原キャンパス）
参加者数	27 名
内　　容	学内の学生ボランティア団体（Roote、fan × fun、SIVA、僕らの夏休み Project）の活動紹介を行った。会場には団体別スペースを設け、全体での説明の後に個別相談会として興味のある団体と直接相談できるようにした。
成　　果	新入生、学生団体の双方にとって有意義な場であったと思われる。個別相談会の間には、個人での活動についての質問が数件あった。今後は学生団体向けの説明会のほかに、学外でボランティアを募集している団体の説明会の実施についても検討していきたい。

事 業 名	防災ボランティア講習
日　　時	2019 年 6 月 11 日（火）18：30 ～ 20：00
会　　場	F 棟 2 階グローバル・ラーニング・コモンズ（相模原キャンパス）
参加者数	12 名
内　　容	防災運営教材「ＨＵＧ」を用いてワークショップ形式の講習を実施した。避難所で次々と起こる出来事を疑似体験しながら、避難所の運営と役割について学んだ。
成　　果	・学生のみならず、教職員の方々が多く参加され、真剣に取り組まれていた。教材は小学校を想定した避難所運営であったが、施設を大学と置き換えることができる内容であったので、本学での災害時の対応を考える上でも役立つ講習であったと思う。
参加者のコメント	・運営をしてみることで、より具体的に考えることができた。 ・見えなかった課題が見えてきて焦った。今から避難所になることを考えて備えたい。 ・行動しないと分からない点に多々気づかされた。



事 業 名	オープンキャンパス（青山）
日　　時	2019 年 8 月 4 日（日）～6 日（火）　10：00 ～ 16：00
会　　場	ボランティアセンター（青山キャンパス）
内　　容	オープンキャンパス大学共通企画として「大学生によるボランティア活動紹介」を実施した。Roote の活動写真や成果物の展示説明の他、折り紙づくりの簡単なボランティア活動や地域のボランティア紹介も行った。
参加者数	8 月 4 日（日）　学生 40 名　保護者　31 名 8 月 5 日（月）　学生 29 名　保護者　16 名 8 月 6 日（火）　学生 25 名　保護者　14 名　　合計　155 名

事 業 名	オープンキャンパス（相模原）
日　　時	2019 年 7 月 14 日（日）　10：00 ～ 16：00
会　　場	F 棟 1 階（相模原キャンパス）
内　　容	「青学生のボランティア活動の紹介」と題して、これまでボランティアセンターで実施してきた企画や、ボランティア活動を積極的に取り組んでいる学生団体の活動写真の展示等を行った。

事 業 名	国際協力プランナー入門
日　　時	2019 年 9 月 18 日（水）～ 19 日（木）
場　　所	17406 教室（青山キャンパス）
参加者数	15 名（大学生 12 名、短大生 3 名）
内　　容	グローバルイシューに関心のある学生対象に、途上国問題について学び、2 日間で自分たちの手でアクションプランをまとめるワークショップ型研修を実施した。受講後には実施 NGO から研修修了証が発行された。
成　　果	青山、相模原キャンパスから計 12 名と事前申し込みの半数以下の出席率であったが、冒頭のアイスブレイクは参加学生それぞれのこの講座に対する期待の高さが伺えた。 この研修プログラムはロールプレイングやレクチャー、そしてグループワークとバランスよく組み込まれていたが、一方、2 日間という限られた時間の中で、アクションプランまで立てるのは容易でなく、学生の理解度にかなりのばらつきが生まれてしまった。 次年度はより参加学生の満足度と研修の質の向上を求めるほか、受講者増員を目指して工夫を凝らしていきたい。
共　　催	NPO 法人 GLM インスティチュート 青山学院大学ボランティアセンター

事 業 名	ボランティアカフェ（青山）
日　　時	1 回目：5 月 23 日（木）　4 回目：10 月 1 日（火） 2 回目：6 月 11 日（火）　5 回目：11 月 8 日（金） 3 回目：6 月 18 日（火）　6 回目：12 月 5 日（木） 時間はすべて 12：35 ～ 13：15
場　　所	ボランティアセンター（青山キャンパス）
参加者数	1 回目：11 名　4 回目：8 名 2 回目：4 名（うち職員 1 名）　5 回目：7 名（うち教職員 3 名） 3 回目：4 名　6 回目：7 名（うち教職員 3 名）
内　　容	ボランティアには興味があるけど、なかなか参加の一歩を踏み出せない学生向けに、社会課題に取り組む NPO 団体・個人をゲストスピーカーとして招き、課題を取り巻く環境や活動体験を語ってもらうイベントを今年度から開始した。前期と後期で今年度は計 6 回開催した。それぞれの回のテーマとゲストスピーカーは次のとおり。 【1 回目テーマ】子供の貧困、 【ゲストスピーカー】NPO カタリバ　アダチベース 【2 回目テーマ】里山と SDGs、 【ゲストスピーカー】棚田保全ボランティア（個人） 【3 回目テーマ】海外ボランティア、 【ゲストスピーカー】NPO good! スタッフ 【4 回目テーマ】SDGs、 【ゲストスピーカー】日本 NPO センター 【5 回目テーマ】平和構築、 【ゲストスピーカー】平和村ユナイテッド 【6 回目テーマ】障害者福祉、 【ゲストスピーカー】日露障害者支援交流プログラム参加者（青学生）
成　　果	各回、少人数だったこともありアットホームな雰囲気の中、行うことができた。テーマに沿ってそれぞれ関心のある学生が参加してくれたが、中には必修である英語の授業で NPO/NGO について調べ、発表するために参加したという学生もいた。また、ボラカフェがきっかけとなり NPO でボランティア活動を始めた学生もいて、最初の一歩を後押しするという当初の目標はおおむね達成できた。SDGs や海外ボランティアなど青学生の関心を引くキーワードやどのような情報源としての広報媒体について良いヒアリングの機会ともなった。6 回目では障害者週間との連動企画として、ロシアの障害者福祉をテーマに青学生 3 名から自身の体験を語ってもらったが“発表”という行為自体が学生の成長に繋がり、参加者と発表者、双方に取って良い成果を得られた。

事 業 名	ボランティアカフェ（相模原）
日　　時	2019 年 10 月 8 日（火）18：30 ～ 19：30
会　　場	ボランティアセンター相模原キャンパス（F205 室）
参加者数	3 名
内　　容	活動の第一歩を踏み出してもらうことを目的としたイベントを、相模原キャンパスにおいても試験的に実施した。初回のテーマは「身の丈で始める国際ボランティア」とし、ゲストスピーカーの原田健斗氏（地球社会共生学部 4 年）のタイ北部山岳地域での活動を中心に、国際協力ボランティアについて理解を深めた。
成　　果	ボランティア関心層かつ国際協力に関心のある学生に満足してもらえる内容であったが、対象とした学生へ情報が行き届いていなかった為か、参加者の少ない結果となってしまった。今後は広報手段や開催時期（時間）を見直し、一定数の参加者の見込める定期開催イベントとして定着をはかっていきたい。

事 業 名	障害者週間
日　　時	2019 年 12 月 3 日（火）～ 12 月 7 日（土）
場　　所	青山キャンパス 1 号館ラウンジ、青山キャンパス 17 号館、青山キャンパス短大別館、ボランティアセンター
参加者数	総参加者数：97 名 ユニバーサルマナー検定 3 級　65 名（学生 54 名・教職員 11 名） 障害平等研修　7 名（学生 4 名・教職員 3 名） ボッチャ体験講習会　4 名（学生 4 名） 映画上映会：　13 名（学生 5 名・教職員 5 名・一般 3 名） 障害ヒューマンライブラリー　8 名（学生 5 名・職員 1 名・外部 2 名）
内　　容	青学生の障がいへの理解促進・福祉ボランティアの参加促進を目的とし企画。学生スタッフ Roote 福祉プログラムと連動する形で、障害者基本法で定める「障害者週間」に合わせたイベントを学内で実施した。 ・ユニバーサルマナー検定 3 級 高齢者や障がい者など何らかの支援が必要な方へのさりげない接し方や、そのマインドを学ぶ講座。受講料の一部を補助。本学障がい学生支援センターと連携し、障がい福祉に関心のある学生への呼びかけを行った。 ・障害平等研修（Disability Equality Training：DET） 笹川平和財団の奥平真砂子氏をお招きし、東京 2020 オリ・パラのボランティア研修の一つでもある「障害平等研修」を実施。「障害とは何か？どこにあるのか？」という問いをグループワーク中心に参加者同士対話を重ね、気付きを得る研修となった。

	・映画上映会「最強のふたり」 頸椎損傷で体が不自由な富豪と、その介護人となった貧困層の移民の若者との交流を描いた実話にもとづくドラマの上映会を実施。上映前後には経営学部マーケティング学科千葉優子先生により解説をいただいた。 以下、学生スタッフ Roote 主催企画 ・常設展示 障害やパラリンピック競技についてのパネル展示 ・ボッチャ体験講習会 渋谷区スポーツ振興課より講師を招き、パラリンピック競技ボッチャの歴史やルールを学び体験。 ・障害ヒューマンライブラリー 障害をテーマとし「知的障害」「摂食障害」「聾者」「義手ユーザー」のゲストを招きヒューマンライブラリーの手法を用いた対話形式での相互交流企画を実施。
成　　果	多くの企画を障害者週間の内に収めたことによる運営の負担過多は課題としてあるものの、個々の企画に連続して参加する学生もいたことから、障がい福祉に関心の高い学生の掘り起こしができた。また、どの企画においても教員や他センターからの協力によって実現できたことはセンターとしての意義が大きい。
協　　力	青山学院大学障がい学生支援センター 経営学部マーケティング学科　千葉 優子先生 笹川平和財団 奥平 真砂子氏 株式会社ミライロ 一般社団法人ユニバーサルマナー検定協会

事 業 名	こどもテーブル@アオガク
日　　時	2020 年 1 月 11 日（土）10：00 ～ 13：00
場　　所	ボランティアセンター 17 号館イチナナ食堂、17 号館 17410 教室、15 号館第 13 会議室、1 号館 123 教室（青山キャンパス）
参加人数	学生 12 名（青山子ども会 8 名、SANDS 有志 4 名）、 小学生 14 名（常盤松小学校 3 名、神南小学校 11 名）
内　　容	本学と渋谷区との S-SAP（シブヤ・ソーシャル・アクション・パートナー）協定の一環として、ボランティアセンターと学生団体との協働による「こどもテーブル」のプレ企画を実施。地域の小学生を学内に招き、文化連合会「青山子ども会」が中心となって企画し、キャンパス探検・ゲーム（風船リレーや玉入れ等）で遊び、イチナナ食堂で学食を囲んで子どもたちと交流した。当日は国際政治経済学部「学生団体 SANDS」有志学生も運営ボランティアとして参加した。
成　　果	学生団体との企画の協働を通じ、ボランティアセンターと関わる学生の裾野を広げることができた。また、学生団体が普段の活動で培った経験やスキルを地域のこどもたちへ還元する場となった。 活動後の振り返りでは参加学生から今回の活動の気付き、課題、今後の企画への関わりについて、前向きな意見も多く挙がり、次年度実施への連携が期待できる。 学生の振り返り < 抜粋 > ・初対面の子どもたちは最初緊張していた様子でしたが、こちらからの言葉がけで心を開いてくれたのが、良い成果だと思います。 ・子どもがずっと「楽しい」「楽しかった」を連呼してくれていた。 ・青山子ども会として、渋谷区の小学生と交流する機会が少なかったので良い経験になった。 ・保護者から「一人娘なので、お兄ちゃんお姉ちゃんのような人たちと楽しめてよかった」と言ってもらえたことにやりがいを感じた。 ・ぜひ次回もやってほしい。人数を増やして規模を大きくしていけたら良い。来年度も引き続き、青山子ども会に依頼して頂きたいです。 ・今回は子ども会に全て企画・運営してもらったが、次回以降は SANDS も企画に携わらせていただけるとうれしい。
協　　力	渋谷区社会福祉協議会、青山学院大学文化連合会 青山子ども会、青山学院大学国際政治経済学部学生団体 SANDS 有志

事 業 名	教職員ボランティア活動補助プログラム
利用件数	2 件
内　　容	教職員の自発的な社会活動への参加を促進するため、社会活動に参加した教職員に対し、交通費の一部支給など、費用補助を行った。
対　　象	1. 対象者 　専任教職員 2. 対象となる活動 （ア）短大との連携プログラムである岩手県宮古市でのボランティア活動 （イ）東京ボランティア市民活動センター主催「夏の体験ボランティア」への参加 （ウ）ボランティアセンター発信情報への直接参加 ボランティアセンターが提示する学外活動（HP 参照）に参加した場合 （エ）外部団体が企画するボランティア活動への参加 自身で探してきたボランティア活動への参加 ※活動を伴わないセミナー・勉強会は除く
補助活動内容	・岩手県宮古市でのオール青山イベントボランティア　8 月 2 日～ 6 日 ・相模原市災害ボランティア　11 月 16 日

ボランティア・プロジェクト・サポート制度

青山学院大学ボランティアセンターでは、2017 年度から、青山学院大学の学生・教職員が主体となって実施するボランティア活動の促進と可視化を目的として、「ボランティア・プロジェクト・サポ―ト制度」（助成金制度）を開設した。本年度は、コーディネーター伴走型で初めてのプロジェクト作りから取り組む「スタートアップコース」と、これまでの活動を発展させることを目的に取り組む「ステップアップコース」の 2 に分けてプロジェクト企画を募集した。「スタートアップコース」は 2 件、「ステップアップコース」は 3 件のプロジェクトが採択された。

【第 1 期】
募集期間：2019 年 6 月 10 日（月）～ 6 月 14 日（金）
応募件数：スタートアップコース 3 件（採択件数 2 件）
　　ステップアップコース 5 件（採択件数 3 件）
助 成 額：スタートアップコース　上限 15 万円
　　ステップアップコース　上限 30 万円
第 2 期は応募申請がなかったため、実施されなかった。

【スタートアップコース】

プロジェクト名	ザ・ボディショップ×エシカル協会×青学 ～私達の未来のためにできること～
実施期間	2019 年 12 月 13 日 17：00 ～ 19：00（企画開催日時）
実施場所	青山キャンパス内教室
活動概要	シエラレオネのダイヤモンド採掘現場のドキュメンタリー映画上映と、フェアトレードやエシカルな消費の重要性をテーマとしたイベントを学内で企画した。 【当日のイベント内容】 ■ NGO 団体ダイヤモンド・フォー・ピースによる映画『ダイヤモンドの来た道～シエラレオネ採掘現場の声～』の映画上映。 ■ 英国自然派化粧品ブランド THE BODY SHOP と一般社団法人エシカル協会代表末吉里花氏によるパネルディスカッション。 ■ 身近なフェアトレード商品の紹介。
活動のきっかけ	フランス文化特講の授業を通して身近なファッションが世界の多くの人々を苦しめているという事実に触れ、安価なファストファッションや、愛の象徴であるダイヤモンドが作られる背景にある途上国の労働者の現状を知った。この悲しい事実を我々の知識として留めておくのではなく、青山学院大学の学生や教職員の方に知り・考えてもらうことにより、私たちが現状を変化させる解決の一歩になりたいと考え、啓発プロジェクトを企画した。

成果と課題	【成果】 ■　学びをアクションにつなげること 企画を進めるために関連イベントへ参加し、世界の諸問題について様々な視点から学ぶことができた。今後未来を担う一員としてさらに解決へのアクションを深く考えることに繋げることができた。 ■　コミュニケーションの重要性 プロジェクトを遂行する過程を通して、メンバー間の多様な意見を尊重し共有しながら企画成功にむけて活動を行うことが重要であると感じた。また、一般の企業や法人団体に対して私たちの意思を明確にし、積極的なアプローチや交渉によって、招聘が実現できた。 【課題】 イベントの集客が目標値に対して少なかったことから、企画の目的のとしていた、フェアトレードの問題を学生や教職員の方へ伝え、現状を変化させる解決の一歩となることへの達成度が低かった。

プロジェクト名	タイ北部　オーガニックコーヒープロジェクト
実施期間	2019 年 8 月 25 日～ 30 日（現地調査） 2019 年 12 月 23 日（学内企画）
実施場所	タイ北部　チェンライ地域 相模原キャンパス内ホール
活動概要	タイ北部のチェンライ地域でのフィールド調査と学内での展示イベントを企画した。 【学内でのイベント内容】 ■　オーガニックコーヒー生産に関する写真展示 ■　コーヒーの配布、製品の紹介 ■　ホームページ、SNS での情報発信、来場者アンケート
活動のきっかけ	プロジェクトを通じて、エシカル消費を促進していく上で、消費者（日本の私たち）にタイのコーヒー生産者について興味を持ってもらいたいと考えた。実際に現地を訪問して、私たちが感じたこと、経験したことをリアルに知ってもらえるような企画がしたかった。
成果と課題	【成果】 ■　展示を通じたアクション コーヒーやコーヒー豆・粉の販売は実行できなかった一方で、展示の説明や来場者からの質問に答えることから、山地民の生活や人や環境にやさしいオーガニック、フェアトレードについてより深く知ってもらい、意識変化を促すことができた。 （コーヒー配布 220 人、アンケート回答者数 77 人、HP アクセス数は 600 回以上。） ■　チームワーク作り メンバーの適正に合わせてチームを作り、タスクを配分したり等の工夫をしたことによって、当初プロジェクト協力へのモチベーションが低かったゼミ生に当事者意識が芽生え、来場者に自らの言葉でオーガニックを消費する意義や生産者について説明するなど、メンバーが一丸となって企画を成功させることができた。 【課題】 ■　今後学外で様々な人を対象に活動し、多くの人の意識を変えること、そして影響を与えるためにどのようにアプローチすれば参加者の心に残るのか考えて活動につなげていくこと。

【ステップアップコース】

プロジェクト名	ペットボトル灯篭プロジェクト（Youth for Ofunato）
実施期間	2019 年 6 月 7 日～ 10 月 27 日
実施場所	岩手県大船渡市三陸町越喜来地区
活動概要	東日本大震災の被災後から団体メンバーが交流を継続してきた地域で、閉校予定となった越喜来中学校でのイベント企画を通して、地域住民が越喜来への愛着を深め、世代を超えて地域コミュニティの繋がりを継続できる機会を企画する。 【イベント内容】 ■ 「思いを灯そうプロジェクト」として、保護者のメッセージと中学生のメッセージを募集し､これらのメッセージを灯す「灯篭文字パネル」と、三陸港まつり会場までの経路を灯す「ペットボトル灯篭」の展示。 ■ 「思いを記そうプロジェクト」として、越喜来中学校の創立 50 周年記念アルバム「ぽぷら」から各年度の集合写真を抽出するなど、創立以来計 73 年分を展示する写真展を実施。 <u>イベント参加者数</u> 実施期間中延べ 231 名
社会的効果	【思いを灯そうプロジェクト】 今年度の参加者数は、初年度（2017 年度）の約 3 倍であり、「より多くの地域住民が祭りの準備段階に参加する」というプロジェクト目標は達成されたと言える。 【思いを記そうプロジェクト】 越喜来中学校最後の文化祭で体育館の一角で行った展示には、保護者の方を中心に人が集まり、当時の思い出話に花を咲かせている姿を見ることができた。前日に作成したチラシを配布することにより、幅広い年代に企画の認知を認知していただく機会にできた。 双方のプロジェクトを実施したことにより、幅広い世代の地域住民が越喜来に対する愛着を深められたと言える。
今後の展望	これまでプロジェクト準備の拠点であった越喜来中学校が閉校する来年度以降は、地域の巻き込み方をより一層工夫する必要がある。これまでの活動で培った繋がりを活かし、将来の地域の担い手となる中高生・保護者世代の担う部分を増やしていきたい。加えて、今回は、保護者世代をターゲットとしていたため、展示写真が限られていたが、今後は、展示する写真の年代を増やすことで、より幅広い年代にアプローチをしていきたい。

プロジェクト名	子どもの意識改革プロジェクト
実施期間	2019 年 8 月 8 日～ 8 月 16 日
実施場所	フィリピン国セブ市ロレガ地区
活動概要	スラムの抱えている課題に対して、クイズやゲームなどのアクティビティを通して、子どもたちが抱えている思いへの「気づき」を生み出す取り組み。 ■ 小学 6 年生 44 名を対象として、将来の夢へのステップの明確化と共有。 ■ 小学 6 年生 44 名を対象として、好きなことをベースにした絵本作成と共有。 ■ 子ども 30 名を対象として、自分の理想の街について考え、今自分ができることに気づくこと、ポスター制作、ごみ拾い。
社会的効果	参加した子どもたちへのアンケートから、将来へのモチベーションを高めることができたことがわかった。また、子どもたちがゴミ問題の深刻さを意識化できたことは、ポイ捨てをなくし、ゴミ箱に捨てる習慣をつけるための大きな一歩である。 本企画による子どもたちの気づきから、子どもたちが思いを行動に移すことで、家族や友人たちに同様の気づきを与え、コミュニティに気づきを与えることができると考える。また子どもたちが自ら考え、自分で道を見つけるものであるという新たな思考を与えることができ、子どもたちが直面する課題に対処していく力を養うことにつながったと考える。
今後の展望	今回の企画で子どもたちに気づきを促すことできたことは成果であったが、行動に移すと考えられるほどに十分な理解ができた子どもは多くなかった。行動に移す意義を明確に伝えるなど、より直接的なメッセージにも焦点をあて、子どもたちが不可能ではないと思える機会や主体的になれる機会を創出すする活動を行う必要があると考える。 また、渡航中に企画メンバーが子どもたちに囲まれた際に、スマートフォンの盗難被害にあった。その他、ウィルス性胃腸炎体にかかったメンバーが発生したため、危機管理の面でより一層対策が必要である。

プロジェクト名	相馬市立中村第二中学校での夏休み学習プロジェクト
実施期間	2019 年 8 月 19 日～ 8 月 21 日
実施場所	福島県相馬市立中村第二中学校
活動概要	相馬市立中村第二中学校の希望生徒に対する学習支援、ならびに、希望する生徒・保護者に対するキャリアサポート座談会の実施。 【実施内容】 ■ 学習支援プログラムを実施し､昨年度参加生徒約 50 名前後（1 日あたり）に対し、今年度は、68 名（1 日あたり）と大幅に増加した。 ■ 各学年で、大学生による模擬授業とレクリエーションの実施。 ■ お別れ会開催 ■ 放課後の時間に、教育委員会と宿泊先であるトモエ屋旅館の全面的協力のもと、希望生徒と保護者を対象とした「キャリアサポート座談会」を開催。 中学生と保護者の参加者数 実施期間中延べ　204 名
社会的効果	昨年度から引き続いた今年度の実施によって、本プロジェクト以外に教育委員会等が実施している教育プログラムへの生徒の参加が大幅に増えた、と相馬市教育委員会から報告があった。本企画自体では、生徒の参加者数が増加したことと、学校や市教育委員会からのニーズ（キャリアサポート）に応えることができ、大好評を得ることができた。 「キャリアサポート座談会」では、学校現場とは異なるアットホームな雰囲気のなか、大学進学や勉強の仕方を中心として、子どもたちや保護者の疑問に大学生が答えるかたちで充実した時間となった。大学進学を視野に入れて高校受験や日々の授業に臨む生徒が大幅に増えたことが報告されている。
今後の展望	保護者への認知度が低く、生徒に比べて参加者が大変少なかった。参加した保護者からの評価は非常に高く、実施に意義があった（相馬市にはほとんど大学生がいない）ので、次年度実施するのであれば、保護者をどう集めるのかを教育委員会と共同で模索したい。 学習支援活動も座談会も非常に評価が高く、次年度以降も実施を強く依頼されたので、さらなる活動の展開を模索したいと考えている。

3.2 共催・協力事業

事業名	認知症サポーター養成講座（相模原）
日　時	2019 年 5 月 14 日 (火)18:30 ～ 20:30
会　場	F 棟 2 階グローバル・ラーニング・コモンズ（相模原キャンパス）
内　容	全国キャラバンメイト連絡協議会に講義を行ってもらい、後半には、相模原市若年性認知症家族会より、家族が認知症と分かった時の心情等についてお話いただいた。また後半には、相模原市社会福祉協議会より地域の福祉関連のボランティア情報を中心に共有していただいた。3 つのグループに分かれディスカッションの時間も設け、盛んな意見交換の場とした。
成　果	当初の想定を超える申し込みが入り、学生、教職員の本講座への関心の高さが見受けられた（学生 11 名、教職名 4 名参加）。アンケートの項目「今後高齢者分野のボランティア情報があればボランティアセンターから連絡が欲しいですか」という質問に対し、6 名が「はい」と答え、高齢者分野のボランティア関心層を掘り起こすことができた。
共　催	全国キャラバンメイト連絡協議会　（協力：相模原市社会福祉協議会）

事業名	認知症サポーター養成講座（青山）
日　時	2019 年 5 月 17 日 (金)18:30 ～ 20:30
会　場	17403 教室（青山キャンパス）
内　容	全国キャラバンメイト連絡協議会から派遣された木村 誠 氏に講義いただき、認知症に関する知識や渋谷区での取り組みについて学ぶ。受講者には認知症サポーターの証であるオレンジリングが渡された。
成　果	当初の想定を超える申し込みが入り、学生、教職員の本講座への関心の高さが見受けられた。学生、教職員合わせ 21 名参加。アンケートにて、「今後高齢者分野のボランティア情報があればボランティアセンターから連絡が欲しいですか」という質問に対し、6 名が「はい」と回答。高齢者分野のボランティア関心層を掘り起こすことができた。
共　催	全国キャラバンメイト連絡協議会

相模原キャンパス

青山キャンパス

事 業 名	全国 NGO 海外ボランティア合同説明会
日　　時	2019 年 5 月 29 日（水）　15：00 ～ 18：00
場　　所	イチナナ食堂（青山キャンパス）
参加者数	60 名（推定）
内　　容	海外スタディツアー・ワークキャンプを実施している国際協力 NGO 及び海外ボランティアの合同説明会。今年は国際協力 NGO やワークキャンプを企画手配する旅行会社 16 団体・社が出展し、プログラムの説明や相談会を個別ブースで行った。
成　　果	開催日を授業数の少ない水曜日に設定したが、出展団体からは昨年以上の来場者数であったという声が多かった。来場者はまんべんなくブースに立ち寄り、団体が提供するプログラムの説明を熱心に聞いている様子が伺えた。また、今年度は初めて説明会の当日に学内でチラシ配布も行った。
共　　催	海外ボランティア合同説明会実行委員会 青山学院大学ボランティアセンター

事 業 名	『夏の体験ボランティア』キャンペーン 2019 ガイダンス説明会
日　　時	2019 年 6 月 13 日（木）19：00 ～ 20：00
場　　所	17407 教室（青山キャンパス）
参加者数	当日の参加者 14 名（内職員 1 名）、資料のみ 1 名、アンケート回答数 9 件
内　　容	東京ボランティア・市民活動センター（TVAC）が毎夏実施している「夏体験ボランティア」の大学キャンパス内ガイダンス。昨年同様 TVAC やしぶやボランティアセンター、受け入れ 4 団体が本学に出向いて説明を行った。「ボランティアプログラム教職員参加機会の拡充」対象の活動となる。
成　　果	開催曜日、時間帯は昨年同様で参加者は微増。夏ボラの応募方法や受け入れ団体の発表を熱心に聞いていた。参加者アンケートにも好意的なコメントが寄せらせた。 ＜参加者からのコメント＞ ・活動場所がたくさんあり、選びやすい。ぜひ参加してみたい ・夏ボラという言葉を知っただけでも来た意味があった。たくさんのプログラムがあるので自分に合うものを探すのは大変そう。 ・どのイベントもとても素敵だと思う。予定を合わせて参加したい。
主　　催	東京都社会福祉協議会　東京ボランティア・市民活動センター
共　　催	青山学院大学ボランティアセンター、しぶやボランティアセンター

事 業 名	外国人おもてなし語学ボランティア養成講座
日　　時	2019 年 6 月 19 日（水）15:00 ～ 18:30
場　　所	17406 教室（青山キャンパス）
参加者数	32 名（事前申込者 50 名）
内　　容	東京都が市民向けに実施しているボランティア養成講座を 2017 年度に引き続き、青山キャンパスで 2 回目の開催をした。観光等で東京を訪れる外国人に対し、どのような「おもてなし」対応をとるのかを学んだ。

成　　果	3 時間半という長時間にもかかわらずグループワークやロールプレイングを交えた構成となっており、事後の受講者アンケートの内容はおおむね好評であった。特に講師の実体験を交えた外国人に声がけする際のポイントや注意事項などは興味深く受け止められていた。 途中で退室した学生も 2 名ほどいたが、都の判断により 32 名全員が受講者として認定証とボランティア情報にアクセスできる専用サイトへのアクセス権が付与された。
主　　催	東京都生活文化局

事 業 名	塩竈市浦戸諸島夏まつりボランティア
実施期間	2019 年 8 月 12 日 (月) ～ 15 日 (木)
場　　所	宮城県塩竈市浦戸諸島（野々島、桂島）
参加者数	12 名 (学生 11 名、引率 1 名)
内　　容	これまで学生ボランティアプログラムとして実施してきた「浦戸諸島プロジェクト」の活動を概ね継承する形で実施。13 日（桂島）、14 日（野々島）と各島で行われた夏祭りの準備・片付けに加え、今年度は青山学院大学ボランティアセンターとしてブースを設け、輪投げやカレー販売を行った。また、これまで活動してきた本学 OBOG も参加し､多くの交流が生まれた。活動の前後には、仲卸市場の視察や鹽竈神社への参拝、防災センターの見学が行われた。
参加者の感想	・遠い地域で行うボランティアに対して大変だというイメージを持っていたが、イメージが変わった。 ・ボランティア活動を重く感じず、自分も楽しみながら他人の役に立つことが出来るものであると感じることが出来るようになり、その考えを友人や家族に伝えていきたいと思いました。 ・島の人々、多様な人と関わって自分とは違うものの見方、考え方をする人に出会い視野が広がりました。
共　　催	宮城県塩竈市

事 業 名	塩竈市学習支援ボランティア
実施期間	2019 年 8 月 27 日 (火) ～ 30 日 (金)
場　　所	宮城県塩竈市　塩竈市立杉の入小学校、第三小学校
参加者数	5 名 (学生 4 名、引率 1 名)
内　　容	包括連携協定に基づき、塩竈市教育委員会との共催企画として塩竈市内小学校での学習支援ボランティアを実施。授業補助や放課後アフタースクール事業「わくわく遊び隊」でのゲーム遊びを提案し、学生ボランティアが主導となって活動した。 活動初日には、本学卒業生である（株）渡會の渡會社長によるご厚意のもと、塩竈神社の参拝や、社員による震災時の体験談を拝聴した。また、最終日は教育委員会の案内のもと、勝画楼や御釜神社など通常は立ち入れない市の文化財を見学し、仲卸市場や津波防災センター等の視察を行い、当市の歴史や文化、産業に触れる機会となった。
参加者の感想	・渡會の社員さんから、被災時のリアルな話や、会社の状況を聞けて、当時から現在までの復興を実感することができた。 ・「自分たちが小さい頃に、大きな地震があったみたいなんだよね」という子どもの発言にハッとした。震災の被災地でも記憶にない世代が増えてきて、その世代に対しても震災を伝えていく責任があると感じた。 ・将来起業をしたときに、社会や子どもを大切にできるような経営方針を立てて活動していかなければならないと感じた。ボランティア活動は利益や金銭とは対極に位置するため、自分のライフスタイルの一部分として関わっていきたい。
共　　催	塩竈市教育委員会
協　　力	株式会社渡會

事 業 名	渋谷区総合防災訓練　警視庁ボランティア
日　　程	2019 年 8 月 31 日（土）
場　　所	代々木総合運動場
参加者数	3 名
内　　容	渋谷区が毎年開催している総合防災訓練に本学学生が参加。警視庁の災害ボランティアとして救出後の搬送活動を行った。
主　　催	警視庁渋谷警察署

事 業 名	総社市英語特区ボランティア募集
実施期間	2019 年 9 月 9 日（月）～ 13 日（金）
場　　所	岡山県総社市内の幼稚園、小・中学校
参加者数	7 名
内　　容	包括連携協定に基づいた英語特区ボランティアプログラムを総社市主催で実施。総社市内の英語特区に指定されている昭和地区の幼稚園、小学校、中学校で英語学習サポートを行った。
成　　果	教育学科以外にも英米文学科、国際経済学科の学生 7 名が参加。毎年、英語教育または学校教育に関心の高い学生が応募してくるが、事後レポートでは「教員のサポート」以上に児童との交流が大きな学びとなったという意見が多数見受けられた。また、幼稚園、小学校、中学校と幅広い年齢層の児童たちと接することで多様な教育の在り方を知る機会となった。
主　　催	岡山県総社市教育委員会

事 業 名	災害救援ボランティア養成講座
実施期間	2019 年 9 月 28 日（土）～ 29 日（日）
場　　所	1 日目：17507 教室（青山キャンパス） 2 日目：午前／池袋防災館　午後／ 17809 教室（青山キャンパス）
参加者数	7 名（事前申し込み 12 名）
内　　容	災害時のボランティアリーダー育成を目的に、渋谷区や警察、消防などによる防災講和、防災館での体験学習を 2 日間かけて行う講座を災害救援ボランティア推進委員会の協力のもと初めて開講した。通常カリキュラムに含まれる「上級救命講習」は学生生活課が募集時、もしくは各消防署での受講を促した。
成　　果	受講者数 7 名と定員を下回ったが、実施時期が台風 15 号の被害報道の最中だったためか参加者からは「実際にボランティアに行く前に知識をつけたい」「将来、消防隊員になりたい」などといった実践を視野に入れた声が多かった。 少人数だったがグループワークもまとまりがあり、参加者の満足度は高かった。次年度は学生が参加しやすい時期に設定し、今回希望が多かった「上級救命講習」もカリキュラムに加えた 3 日間コースとすることを検討していく。
協力団体	災害救援ボランティア推進委員会

事 業 名	学生向け子どもの居場所づくりセミナー
日　　時	2019 年 11 月 22 日（金）18：30 ～ 20：30
会　　場	D213 教室（相模原キャンパス）
参加者数	7 名（うち青学生 2 名：理工 1 名、地球社会共生 1 名）
講　　師	NPO 法人サードプレイス代表理事　須田洋平氏
内　　容	相模原市社会福祉協議会が取り組んでいる子どもの居場所づくり支援について、子ども食堂や無料塾などのボランティア活動に興味のある学生を対象としたセミナーを実施した。子どもの居場所づくりの意義や学生に期待される役割を学び、実際に子どもの居場所づくりに取り組んでいる学生の発表や、ワークショップを実施することで、子どもの居場所づくりの活動への参画を促す機会となった。
所　　感	外部の学生も参加されたため、本学の学生にとってこれまでの企画とは異なった刺激のあるセミナーであったと思う。運営面では相模原市（社会福祉協議会）への協力事業という位置づけでの実施が初めてであったため、広報や申込受付の協力体制についての確認を行った上で進めた。次年度以降も学生向けの同様の企画が実施されるようであれば、引き続き開催へ向けたサポートを行っていきたい。
主　　催	相模原市（実施：相模原市社会福祉協議会）

事 業 名	外国にルーツを持つ子どもの学習支援について知ろう
日　　時	2019 年 12 月 6 日（金）18 時 30 分～ 20 時　② 12 月 7 日（土）10 時～ 12 時
会　　場	① F 棟 2 階グローバルラーニングコモンズ（相模原キャンパス） ②相模女子大学茜館
参加者数	7 名
講　　師	NPO 法人多文化共生ネットワークかながわ　妹背　真理子氏
内　　容	多文化学習活動センター CEMLA の指導員から、相模原地域における外国に繋がりをもつ中高生の就学状況とその支援について説明いただき、ボランティアとしてかかわりを持つことについてのアドバイス等を受けた。また、講義翌日には上記団体の活動先へ行き、活動見学とボランティア体験を実施した。

参加者アンケートより（抜粋）	・教員を目指しており、これまでも様々な子供達とふれ合ったことがあったが、今回もまた違う子供達とふれあってみたいと思ったため参加した。 ・良い経験になると思って参加した。事前に説明会があったのでよかった。
所　　感	関心のある学生を活動現場へ繋げることで、活動実施の促進がなされたことを期待したい。また本団体は、2019 年度前期科目「サービス・ラーニングとしてのボランティア活動」（青山スタンダード科目・相模原キャンパスにて実施）のボランティア活動の受入先としても協力いただいた。引き続き学生をボランティアとして受け入れていただけるよう、連携を深めていきたい。
協　　力	多文化学習活動センター CEMLA

事 業 名	仙北市冬季交流ボランティア
実施期間	2020 年 2 月 16 日（木）～ 19 日（日）
場　　所	秋田県仙北市
参加者数	7 名、引率者（コーディネーター）1 名
内　　容	包括連携協定を締結している仙北市との交流事業の 4 回目の実施。田沢湖高原雪まつりの設営準備や一人暮らし高齢者宅での除雪作業などのボランティア活動を通じて、地域住民の方々と交流した。また、田沢湖クニマス未来館や角館樺細工伝承館の視察を行い、仙北市の歴史や風土・伝統文化の理解を深めた。 2 月 16 日 (木) 初日 田沢湖庁舎にてオリエンテーション、田沢湖たつこ像周辺及びクニマス未来館の視察 2 月 17 日 (金) 二日目 門脇市長に表敬訪問、雪まつりの設営準備【雪像作り、かまくら灯篭作り等】 2 月 18 日 (土) 三日目 西木地区の高齢者住宅での除雪作業、田沢湖高原雪まつり会場の視察 2 月 19 日 (日) 最終日 角館武家屋敷にて冬語り、角館樺細工伝承館の視察、帰京

成　　果	事前研修にて自己目標の設定を課題とし、活動初日に参加者間で共有しフィードバックを行ったことで、プログラムの学びの要素と活動への動機づけを深めることができた。参加学生は仙北市職員や地域住民からの温かい歓迎を受け、地域の魅力や現状の課題を学ぶ機会となり、全体として満足度の高い活動となった。 以下、参加者の感想【事後レポートより抜粋】 ・ボランティアというと大変なイメージがあったが、今回の活動では楽しかったという感情の方が先に出る。4 日間を通して様々な方と関わる機会があったが、本当に温かく迎えて頂き、大変うれしかった。 ・仙北市で学んだ歴史や文化を自分たちが住んでいる地域に持ち帰り、友人や家族などに共有、伝承することが重要と思った。 ・最近自分が史学科で本当に良かったのかと悩むこともあったが、今回参加して、歴史は全てに繋がるということを実感し、自信を持つことができた。
共　　催	秋田県仙北市教育委員会

事 業 名	渋谷区こどもテーブル
日　　時	各こどもテーブル活動先による。
場　　所	各こどもテーブル活動先
申込者数	20 人　2019 年 4 月～ 2020 年 3 月集計
内　　容	渋谷区社会福祉協議会が実施する「こどもテーブル活動助成」を活用した活動先 14 か所に対する学生ボランティア募集の告知協力。 ＜活動紹介先＞ ・なっつの木（学習支援、レクリエーション、おやつタイム） ・代々木こどもテーブル～春の小川～（学習支援補助） ・2020 年東京オリンピックに向けて英語を学ぶ会（学習支援補助）※ 2019 年 10 月募集終了 ・美竹の丘こどもテーブル ゆめとぴあ（調理補助、学習支援、子どもと遊ぶ、イベント運営） ・パール子どもテーブル活動（学習声支援、子どもと遊ぶ、一緒に食事） ・恵比寿じもと食堂（こどもと遊ぶ、近隣の畑で収穫手伝い） ・上富ダイニング（宿題の手伝い・子どもと遊ぶ・調理する子どもの見守り） ・リフレッシュ氷川こども食堂（子どもと遊ぶ・簡単な調理補助） ・Mama ‘s kitchen(調理補助・子どもと遊ぶ、食事・イベント運営) ・スマイルキッズテーブル (子どもと遊ぶ、宿題をみる、一緒にご飯を食べる) ※ 2019 年 10 月募集終了 ・子どもと一緒に遊び隊 (サマーキャンプ、料理･工作教室、科学実験等を企画･主催・運営) ・なな色カフェ (調理補助、子どもと一緒に遊ぶ、イベント運営) ・おんがく　な・か・ま (音を楽しむ♪音で繋がる♪を合言葉に音楽を軸としたイベント企画を運営) ・桜丘こどもテーブル　渋谷のラジオの教室 (アートで楽しく子どもと遊ぶ、イベント運営、学習支援)
主　　催	渋谷区社会福祉協議会

渋谷区

こどもテーブル
KODOMO TABLE

3.3 AOYAMA VISION 推進事業

サービス・ラーニングパイロットプロジェクトへの協力

昨年度に引き続き、青山学院として掲げる中長期的な事業計画である AOYAMA VISION に位置付けられている「サービス・ラーニングパイロットプロジェクト」に協力した。ボランティアセンターからは、副センター長およびコーディネーター 3 名が主にサービス・ラーニング科目の運用に携わった。

2017 年度から開始した本プロジェクトは 2019 年度を以て終了となり、今後のサービス・ラーニング科目の運用や全学的な展開に向けた課題・提言をまとめ大学執行部へ報告した。

ボランティアセンターでは引き続き必要に応じて AOYAMA VISION 事業に協力していくとともに、蓄積した知見や運用ノウハウを課外であるボランティア活動支援事業にも活用していく予定である。

ボランティアセンターとしての協力

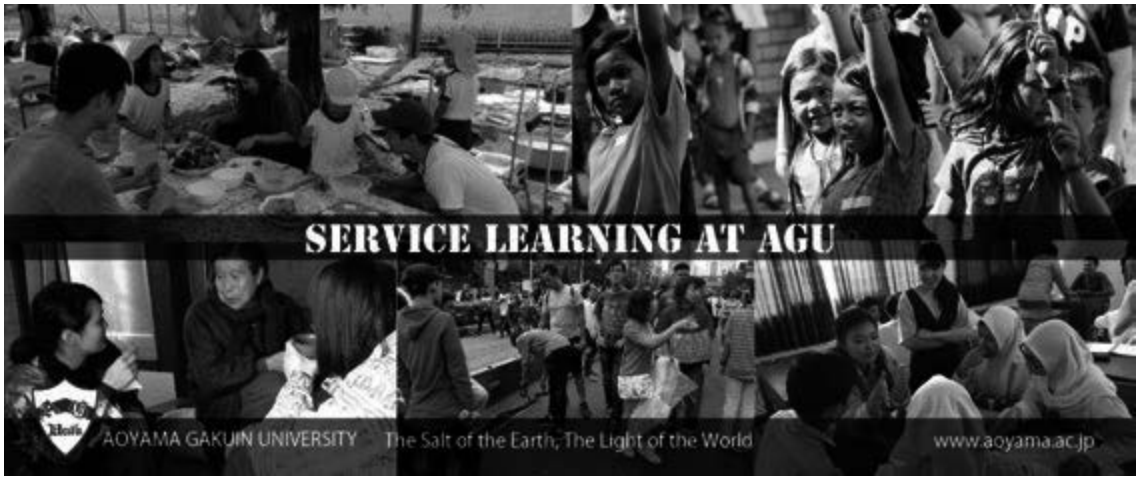
1）サービス・ラーニングの科目の紹介・広報
2）パイロット科目「サービス・ラーニングとしてのボランティア活動」の運営
3）活動受け入れ先との連携・コーディネーション
4）パイロットプロジェクト報告会の実施

1）サービス・ラーニングの科目の紹介・広報

2019 年度にサービス・ラーニングとして開講された青山スタンダード科目の概要や各科目のテーマ、活動分野を紹介する広報カードを作成した。

新年度の各種オリエンテーションやボランティアセンターで学生へ配布、センターホームページ等で広報を行い、サービス・ラーニングを広く周知した。

広報カード（表面）



2）パイロット科目「サービス・ラーニングとしてのボランティア活動」の運営

- 青山スタンダード科目（前期 2 単位、相模原キャンパス）
- 履修生　24 名
- 活動先
  - ・NPO 法人 横浜 NGO ネットワーク
  - ・NPO 法人 地球市民 ACT かながわ
  - ・NPO 法人 WE21 ジャパン相模原
  - ・コトラボ合同会社
  - ・多文化学習活動センター〈CEMLA〉
  - ・淵野辺つばめ塾
  - ・子ども食堂ちゃお！
  - ・NPO 法人アクションポート横浜（中間支援団体）

3）「サービス・ラーニング Ｉ」の運営協力

- 青山スタンダード科目（前期 2 単位、青山キャンパス）
- 履修生　25 名
- 活動先
  - ・渋谷区こどもテーブル〈上富ダイニング、代々木こどもテーブル～春の小川 ～、ささはたっこ、Kidz Table〉
  - ・セカンドハーベストジャパン
  - ・学校法人アジア学院
  - ・渋谷区社会福祉協議会（中間支援組織）

4）パイロットプロジェクト報告会の実施

- 2019 年 11 月 25 日（月）18:00-20:30　於青山キャンパス第 16 会議室
  - ・パイロットプロジェクトの取り組みについて（2017~2019 年度）
  - ・学部科目における地域連携の取り組みについて（事例紹介）
  - ・ディスカッション
    テーマ：「社会と連携した教育取組の意義と持続・可能なあり方とは」

広報カード（裏面）

3・ボランティアセンター事業

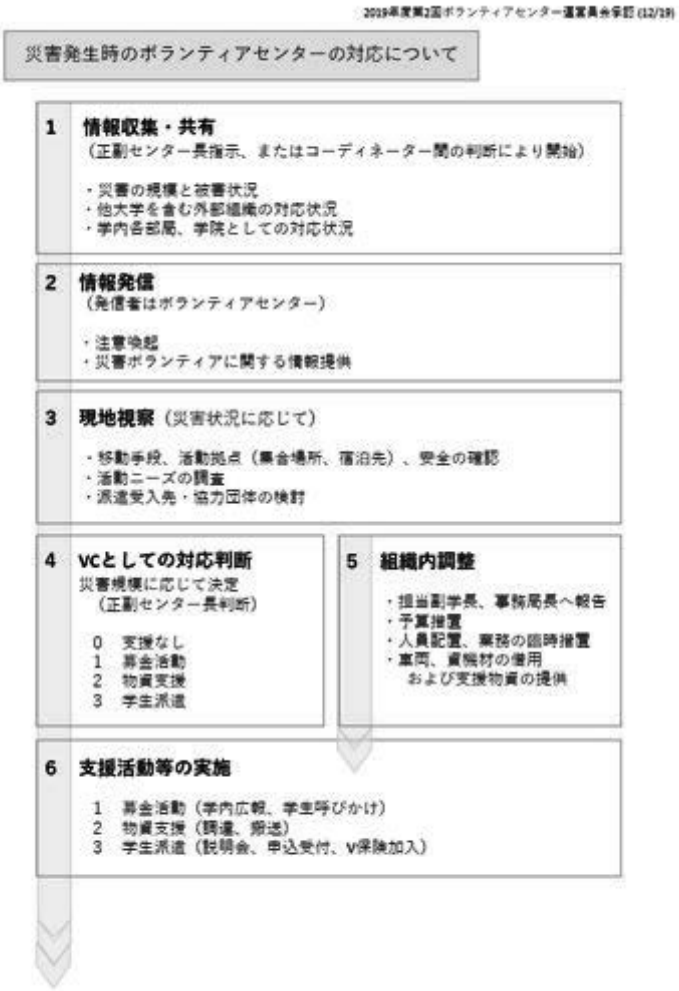
3.4 その他

＜災害時対応について＞

ボランティアセンターにおける災害発生時の対応基準

2018 年度にボランティアセンターの対応基準として「遠隔地で発生した災害への支援について」が定められた。2019 年度においては、令和元年東日本台風（台風 19 号）により本学のキャンパスがある神奈川県相模原市で甚大な被害が出たことから、上記の対応基準を参考に災害支援（相模原市災害ボランティア派遣）を実施した。

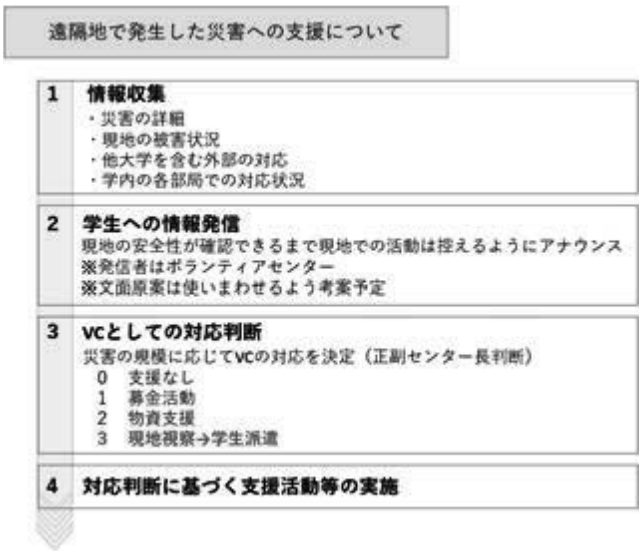
こうした経験を経て、より広い範囲・用途に機能する災害対応フローを再構築し、2019 年度第 2 回ボランティアセンター運営委員会（12 月 19 日開催）にて承認された。2018 年度からの大きな変更点としては、センター長の指示を待たずにコーディネーターが初動対応を始められることや、支援の規模に応じた一時的な業務の見直しや予算措置といった調整が挙げられる。しかしながら後者については、センターとしての対応に加えて関連部署との協力が必要となる事項が含まれており、学内の合意形成にあたって引き続き検討が必要となっている。



令和元年東日本台風対応

1．相模原市災害ボランティア派遣について

「令和元年東日本台風」は関東をはじめ広域にわたって甚大な被害をもたらし、本学のキャンパスがある神奈川県相模原市においても、土砂崩れや倒木による道路の分断、河川の氾濫による浸水等の被害が発生した。この事態へ対応するために、ボランティアセンターの災害時対応基準である「遠隔地で発生した災害への支援について」（下図、（2018 年 11 月時点））のフローを踏襲し、相模原市内の災害ボランティア活動を行うことになった。具体的な支援については以下の手順で行った。



（3-3 が今回の相模原市災害ボランティア活動となった）

（ア）情報収集：２つの方法で最新の情報を得た

①相模原市社会福祉協議会ホームページ

災害ボランティアセンター特設ページが開設され、津久井地区、相模湖地区、藤野地区センターの情報が掲載された。ボランティア募集人数や、実施の有無等、直前まで流動的な情報については公式ブログやツイッターを参考にした。

②担当者へ連絡

これまでの VC 事業を対応していただいていた社会福祉協議会中央ボランティアセンター職員へ連絡をとり、現地の状況や今後の災害ボランティアの動向を確認した。

（イ）情報発信：説明会開催の案内について、以下の日程で発信した

①掲示（VC 前、学生生活課管轄の掲示板）10 月 31 日（木）～ 11 月 22 日（金）掲示

② A 型看板（学食前、メインストリート）10 月 31 日（木）～ 11 月 22 日（金）設置

③ホームページ　10 月 31 日（木）～ 11 月 22 日（金）公開

④学生ポータル 10 月 30 日（水）、11 月 5 日（火）配信

⑤アプリ（らいふいんあおやま）11 月 5・12・19 日（火）、 7 ・14・22 日（金）説明会当日のプッシュ通知配信

⑥過去の災害ボランティア活動参加者へメール配信　10 月 30 日（水）配信

（ウ）現地調査：以下の日程で実施した

① 11 月 4 日（月・祝）

視察という形式で現地へ入ることが難しい時期であったため、コーディネーターが藤野地区の災害ボランティアセンターの活動に参加しながら、センターの運営やボランティアへの対応状況を確認。活動終了後にスタッフからヒアリングを行った。

② 11 月 6 日（水）

車両を手配し、3 地区の被災状況ならびにセンターの運営状況を見て回った。活動の第 1 候補である津久井地区では、ボランティア活動現場を視察し、住民から活動ニーズのヒアリング等を行った。相模湖地区、藤野地区では、スタッフから今後の活動についてのヒアリングを行った。

（エ）説明会：11 月 5 日（火）～ 21 日（木）火曜・木曜（計 6 回）実施

両キャンパスにて（青山は Skype 中継）相模原市の災害状況、各地区センターのボランティア活動状況、災害ボランティア派遣についての案内等を行った。

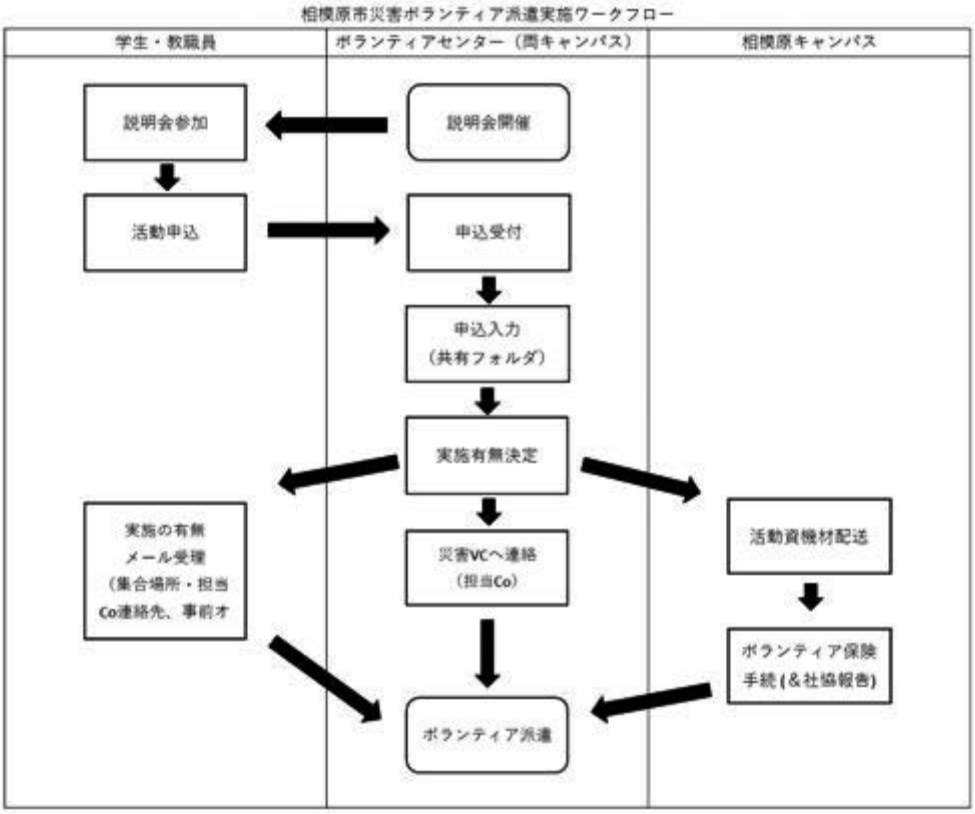
（オ）活動：11 月 16 日（土）17（日）実施。下図ワークフローを基に以下の行動をとった

①実施前

週末・最低催行人数 3 名として募集をかけ、申込状況については毎日更新して周知した。実施の有無は毎週の Skype ミーティングにて決定し、申込者にはメールにて通知、現地スタッフには担当コーディネーターより連絡した。活動物品は実施決定後に必要数を揃えて配送し、ボランティア活動保険の加入は実施前日に社会福祉協議会窓口にて行った。

②実施日

橋本駅北口ロータリーに集合し、コーディネーターの引率の下、レンタカーを使用して現地へ向かった。受付後は現地スタッフの指示に従い活動を開始した。活動は当日の天候や現地の支援状況（ボランティアの必要人数等）に左右されるため、柔軟な対応が求められた。活動終了後、使用した物品はボランティアセンター（相模原キャンパス）へ配送した。



【11 月 16 日の活動（津久井地区・家宅の泥出し）】

【11 月 17 日の活動（藤野地区・被災者向け映画上映会の運営補助）】

2. 学内募金活動について（台風 19 号被災者支援募金）

日本各地で甚大な被害をもたらした台風 19 号の被災者を応援するため、学生ボランティア団体、職員有志による募金活動が学内で行われた。
集まった支援金はいまだ支援を必要とされている地域、方々のために、少しでも役立ててもらえるよう「日本財団災害復興支援特別基金」として、日本財団への寄付とした。

	期間	実施体制	金額
街頭募金	11/12～11/29	学生スタッフ Roote、AIESEC、Shanti Shanti国際ボランティア愛好会、TsunAGUボランティア愛好会、体育連合会、その他有志学生	70,801
募金箱（青山キャンパス）	11/1～11/29		7,030
（相模原キャンパス）	11/5～11/29		1,000
第4次缶バッチ寄付金	11/1～12/1	職員有志	131,169
募金総額			**210,000**

＜外部研究への参加＞

事 業 名	日本福祉教育・ボランティア学習学会第 25 回北海道大会
日　　程	2019 年 11 月 23 日（土）～ 24 日（日）
場　　所	北星学院大学
内　　容	本大会では「多文化共生社会を育む福祉教育とボランティア学習」をテーマとして、基調講演、シンポジウム、自由研究発表や課題別研究にて全国の福祉教育実践者が集まり、実践に基づく成果や課題の共有・議論を深まる場となった。
報　　告	・課題別研究・特別課題研究への参加 「地域包括ケアと福祉教育」（島﨑） 全国的な地域包括ケアシステムの構築を目指し、北海道町村での実践報告が共有された。地域特色から地縁による互助の基盤が確立していることが住民参加型の地域包括ケアの形成を担っていた。一方で、若者世代に対しての取り組みは小・中学校での認知症サポーター養成講座の実施にとどまり、福祉系大学においても資格の取得を目指すことが目的化されている傾向にあるため、若者が地域住民として主体性を形成し、地域の取り組みの中で活躍できる実践の場をボランティア学習として検討していくことが重要であることを認識した。 「共生社会を創造するサービス・ラーニングの評価」（秋元） 「SOFAR モデル（Student, Community Organization, Faculty, Administration, Community Residence）をベースとした SL 関係者間における関係性の可視化・変容」の検討を行った。大学のみならず小・中学校での SL 実践、地域の重層性や関係者の相互変化や波及効果についての議論を深めた。日本で SL 実践が多様化し広がりつつあるなかで、米国を中心に提示されてきた SL の知見や理論に対する批判的検討及び日本社会に即した SL 研究や実践成果の共有が求められる段階にあることを確認する場となった。本課題別研究会の成果として、「SL パートナーシップの評価」という観点から本学での実践事例を中心に論文としてまとめる。
主　　催	日本福祉教育・ボランティア学習学会
参 加 者	島﨑、秋元（ボランティアコーディネーター）

＜ボランティア活動に関するアンケート実施＞

ボランティアセンターが開設して初となる全学部生を対象としたボランティア活動に関するアンケートを実施した。このアンケートを実施することにより、今後の事業計画を策定するうえで基礎的なデータを収集することができた。

実施期間：第 1 弾：4 月 3 日～ 5 日のボランティアセンターオリエンテーション参加者
第 2 弾：4 月 8 日～ 25 日（学生ポータルで発信）
実施方法：Google Form によるオンライン回答

3 週間ほどの実施期間で 643 件の回答があった。アンケート内容はボランティア活動の（1）経験者層、（2）未経験者層、（3）無関心者層に分けて設問を配置した。
ボランティアに興味ありが全体の 87%を占めたが、過去 1 年間に活動経験がある学生は 32%であった。しかし、この内、機会があれば活動してみたいという学生は 83%に及んだ。
ボランティアセンターの認知度に関する質問では 81%の学生がセンターの存在を認識していながら、実際に利用したことのある学生は 14%に留まった。ボランティアセンターの利用者を増加させるために、魅力あるプログラム作りと適切な情報発信が求められる。

4. 学生スタッフ企画プログラム

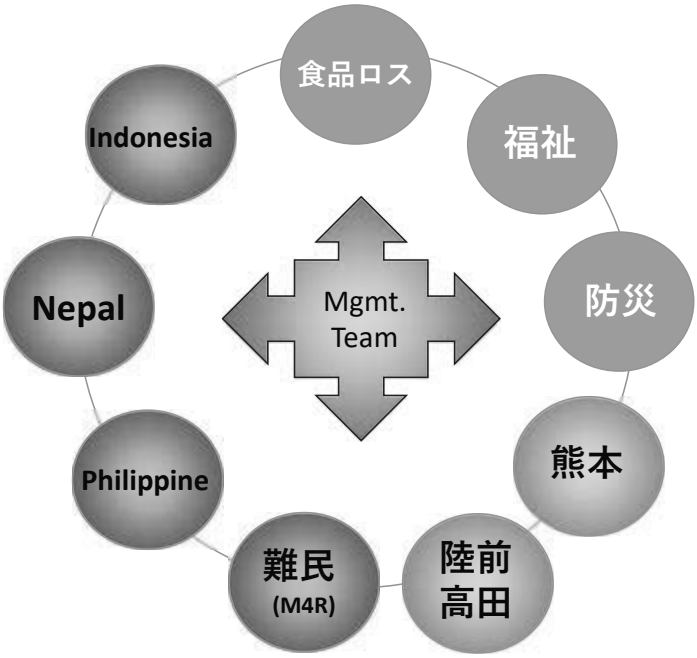
学生スタッフ Roote について

Roote のビジョン
社会問題に対して自ら行動できる青学生を増やし、すべての人々が助け合える社会を目指します。

Roote のミッション
社会問題に関心がある青学生と、ニーズを抱える社会をつなぎ、一人ひとりの思いを行動に変えます。

組織について
組織内のスムーズな情報伝達を向上させるために今年度は組織改編を試みた。
従来のプロジェクト運営を担う部と、業務運営を担う課や、執行部が統括する組織構成を廃止し、新たにマネジメントチームを中心として各プログラムが輪としてつながる組織構造とした。

＜ Roote 新組織図＞



合宿研修

2019 年度学生スタッフ研修を 5 月 18 日（土）、19 日（日）の 2 日間、大学セミナーハウスにて合宿形式で行った。この研修はボランティアセンターと日本財団学生ボランティアセンターの大学間連携協力に基づいて実施したものであり、学生スタッフ同士の連帯感の強化とより質の高いボランティアプログラムを企画・実施するための個人の能力を向上させることを目的とした。当日は 1 年生から 3 年生まで 50 名近い学生スタッフが参加し、2，3 年生にとってはこの 1 年間のロー

ドマップ作り、1 年生にとっては先輩たちの発表を通じて、企画のプロセスについて学び、これからの活動に役立てるための貴重な学修機会となった。

陸前高田プログラム（コミュニティ活性支援、福祉支援）

【活動背景・活動目的】

東日本大震災後の長い月日が経過した岩手県陸前高田市では、震災以前とは異なる新しい生活を築くことを余儀なくされている。地域住民の高齢化、沿岸部に住む住民の高台移住など生活環境の変化が起き、住民はコミュニティづくりを一から始めることになった。

Roote はこれまで、お茶っこ活動を通して移住してきた方々がその地域に馴染むサポートをしてきていた。現在は、地域全体で、形成されたコミュニティでの関わりを増やすことで、お年寄りの健康寿命を伸ばす活動へと移行している。

一方で、市は年齢や性別、障がいの有無にかかわらず全ての市民が手と手を取り合う街づくりを進めている。しかし、障がいのある方々が一般の市民と交流をする機会は未だに少ないのが現状である。これまで同様に「あすなろホーム」で障がいのある方と共に作業を行うことにより、コミュニティの輪を広げる一助とする。

「コミュニティ活性支援」プロジェクト

活動場所：大野公営住宅
活動期間：2019 年 8 月 8 日（木）
参加人数：３名（学生スタッフ１名、一般学生２名）

【活動内容】

この地域のお年寄りたちは「ボランティアサークル “ぜんしん”」の活動に参加し、運動能力の向上を図っている。我々はこの活動に参加し、お年寄りの方々が普段触れ合うことの少ない大学生と交流することによって日常にはない刺激を与えることを目的としていた。しかし、今回の活動では猛暑のために屋外でノルディックウォーキングをすることができなかったため、室内でお話をしたり、体操を行った。

【スタッフの所感】
　以前は聞くことができなかった震災のお話を今回は聞くことが出来た。今回は、福島出身の参加者がいたために、同じ思いを感じ取りやすく、話の幅が広がったと思う。普段話さない内容を話し、その情報を私たち学生に話すことで住民の方々の日々のストレスの軽減、日常会話のマンネリ化を防ぐことができたと考える。“ぜんしん”の代表である佐藤さんのお話によると、ノルディックウォーキングをすることによって、杖を使って歩いていた方が杖を使わずに歩けるようになったそうである。今回は共にウォーク出来なかったがこの活動によってお年寄りの健康意識が向上しているということを改めて感じることができた。

【参加者の所感】
　お茶っ子では古き良き陸前高田市の姿を知ることが出来た。昆布を加工するなかでどこからともなく灰汁が飛んでくること、震災前の思い出のことなどである。さらにこの話以外にも、隣県の宮城・利府町の話を互いに話し合いとても懐かしくなった。同じ東北の者として似通った方言や東北にまつわる話はどこか懐かしく、故郷のような心地であった。

「福祉支援」プロジェクト

活動場所：障害者就労継続支援事業所あすなろホーム
活動期間：2019 年８月６日（火）、８日（木）、10 日（土）
参加人数：６日、８日は１名（学生スタッフ）、10 日は４名（学生スタッフ２名、一般学生２名）

【活動内容】
　あすなろホームでの活動は利用者さんの活動のお手伝いである。わかめの茎と葉を切り分ける作業やお菓子を作る作業等を利用者さんとコミュニケーションをとりながら行い、交流をした。

【スタッフの所感】
　前回と同様わかめのカット作業を行ったのだが、作業も二回目ということもあり利用者さんと楽しく話しながら作業をすることができた。また、今回は体育館でレクリエーションもあったため、より仲を深めることが出来た。

【参加者の所感】
　あすなろホームを通してノーマライゼーションの町づくりの必要性を強く感じた。あすなろホームの利用者との交流を通じて、社会的弱者という言葉に不当性を感じた。彼らの存在や能力をさらに活かすまちづくりがこれからの復興に限らず全国的な社会づくりに必要であると思った。

熊本プログラム（地域活性化支援）

【活動背景・目的】

2016 年４月に発生した熊本地震。我々学生スタッフが現在活動する熊本県南阿蘇村では建物の倒壊や土砂崩れ、鉄道路線の寸断など甚大な被害が発生した。プログラム発足当初は主にインフラや農業に対する支援を行ってきたが、震災からある程度の時間が経過した同村において「観光客の減少」という新たな課題が浮かび上がったため、その課題克服に向けた活動へとシフトしていった。

熊本 WEEK

活動場所：青山キャンパス　中庭、１号館ボランティアセンター内
活動期間：2019 年４月 15 日（月）・16 日（火）・18 日（木）
活動人数：学生スタッフ５名、一般学生及び教員等（販売員）15 名、（購入者）約 200 名
（プレゼンテーション）10 名　合計約 230 名

【活動内容】

南阿蘇村で生産・製造された商品の販売を中庭で行う他、地震前後の村の風景写真を展示したり、また村の現状や観光情報を盛り込んだプレゼンテーションを行った。

【スタッフ所感】

「よりたくさんの人に、南阿蘇村の”今”を知ってほしい。そして訪れてほしい。」という思いで企画した今回の熊本 WEEK。南阿蘇村を被災地ではなく、観光地として PR することを意識した。その結果、商品販売のブースやプレゼンテーションの会場を訪れた学生からは「南阿蘇という場所があることを初めて知った」「空港からのアクセスも良くて、たくさん楽しめる場所が詰まっているのだと分かった」との声を頂き、当初の狙い通りの反応を得ることができたという達成感を持った。また 2018 年 12 月の企画段階からイベントの開催まで現地の方々とコミュニケーションを取る機会が大幅に増えたことが、南阿蘇村の新たな観光情報を得やすい環境につながっていくのではないかと感じている。

【参加学生所感】

（販売員として参加した学生）

ボランティア活動で訪れたことのある南阿蘇村だが、知らなかった特産商品や観光情報が沢山あり、復興へ向けて着実に前へ進んでいるのだという実感を持った。

（プレゼンテーションを見た学生）

今まで南阿蘇村に対しては震災の印象が強かったが、温泉、水源、レジャー施設など多くのスポットにおいて観光客を迎える準備が整っているのだと知りイメージが変わった。

ブランディングプロジェクト

活動場所：熊本県阿蘇郡南阿蘇村
活動期間：2019 年８月 19 日（月）～ 25 日（日）
活動人数：８名（スタッフ４名、一般学生４名）

【活動内容】
　村内観光施設の視察・マーケティング専門家や農家、道の駅職員を交えたワークショップを行った。

【スタッフの所感】
　この活動は、特産品を商品という形でリブランディングすることで南阿蘇村の認知度を向上させることを狙ったものである。また、出荷基準に満たない特産野菜の活用によって農家の費用削減、収益増加が見込めるのではないかという狙いもある。
　当プロジェクトではまず村内の観光施設や農家を視察し、続いてそこで得た知識を生かした商品アイデアをマーケティングの専門家や行政職員を交えてワークショップ形式で話し合うという順序で行った。視察では白川水源や塩井社水源など村内の水源を回ったことで、南阿蘇村においては「水」が重要な観光資源の一つとして認識されていることが分かり、この水を活用した商品で認知度の向上を図ることがニーズとして挙がった。
　今回の活動では具体的な商品案までたどり着くことができなかったが、ワークショップを行ったことで我々のプロジェクトの内容や被災地域の復興というビジョンに対して村の人々の関心と理解、協力を得られたうえ、「水」という今後当プロジェクトを進める中で軸となるコンテンツを見出すことができた。

【参加学生所感】
　今回のブランディングプロジェクトは、一般に学生がイメージする災害ボランティアとは少し視点が違って興味深かった。南阿蘇村を訪れ最初に受けた印象は、「ここは本当に被災地なのか」というものだった。インフラはほぼ完全に復旧し、震災を思い起こさせるものは一見無いように思えた。しかし復興という長期的な目線で見たとき、観光客数の減少や住民の高齢化といった深刻な問題が見えてきて、災害が残す爪痕の深さを実感する。発災直後頻繁に目にした被災地が時を経てどのような状況にあるのか、また残された課題はどんなものかをよく考える機会になった。

ニューオリンズジャズフェスティバル・下切地区交流会

活動場所：熊本県阿蘇郡南阿蘇村および高森町下切地区
活動期間：2019 年 8 月 26 日（月）～ 9 月 1 日（日）
活動人数：8 名（スタッフ 4 名、一般学生 4 名）

【活動内容】
　南阿蘇村を含む阿蘇地域全体を対象にしたジャズフェスティバルは、住民の復興へ向かう気持ちを音楽で盛り上げようと企画されたものである。しかし運営にあたる地元の方々は高齢の方が多かったこともあり、イベントをスムーズに進行させるにあたり、我々学生もお手伝いさせてもらった。若い世代とのコミュニケーションの場にもなった。
　下切地区ではかねてより高齢化によりコミュニティーが縮小し、限界集落となっている。青学生との交流によって少しでもコミュニティーの活性化を図った。

【スタッフの所感】
　ジャズフェスティバルで我々は前日準備及び当日の進行支援を行った。椅子や机、放送機器の移動、取り付けから始まり来場者の誘導まで業務は幅広く体力と気力を要するものであったが、現地

の方々と他大学の学生と連携をとってスムーズに作業できた。当日会場は満席となった。一部の来場者からは、「東京から学生が来ているとは思わなかった。若い人たちが一緒に楽しんでくれるのはうれしい」という声をかけていただき、この活動が意味のあるものだったと実感できた。

下切地区の交流会では、地区内散策ののちビニールハウスの見学、食事会を開いていただいた。お話を聞く中で、高齢者ばかりになって地区全体に活気がなくなり、農業の衰退も始まっているという課題を改めて認識した。

【参加学生所感】

ジャズイベントの準備は長時間の作業で大変ではあったが、現地の方々と沢山コミュニケーションを取りながら楽しく作業することができた。当日は阿蘇地域を含め様々な地域から本場のジャズを聴きに人が来ていたが、復興へ向けて会場全体が一体感を持ったことが感じられたうえ、そのようなイベントに携わることができたことを嬉しく思った。

交流会においては、下切地区に限らず多くの地域で増加する過疎地域の実態を自身の目で確認した。

【今後の展望】

復興支援へのシフト、そして「ブランディング」という全く新しい視点での活動を試みた本年度。来年度（2020 年）の熊本 WEEK 開催は新型コロナウイルスの影響で中止となったものの、PR 映像やプレゼンテーションの配信など人が集まらなくとも PR 出来るコンテンツを見つけて実施していく予定である。さらにブランディングプロジェクトは今後、南阿蘇村のより多くの人々の意見を交えて商品アイデアをより具体的なものにしていきたいと考えている。

防災プログラム（地域防災）

【活動背景】

今後 30 年以内の発生確率が 70% を超えると言われている首都直下地震。首都圏で建物の崩壊のみならず、液状化現象や大規模火災などの発生が想定される。このような自然災害と隣合わせの環境の中で生活している青学生だからこそ、日頃より震災から身を守る術を身に付ける必要がある。昨年度に引き続き、震災後の対応に関する防災イベント実施により、防災に関心のある学生に向けた防災知識の習得機会のニーズに応えるため、そして防災への関心が低い学生への啓蒙を促すためという 2 つの目的を持って活動している。

防災週間

活動場所：青山キャンパス　中庭、１号館ラウンジ
活動期間：2019 年 10 月 7 日（月）～ 10 月 11 日（金）
活動人数：37 名（学生スタッフ 9 名＋一般学生 28 名）

【活動内容】
　5 日間の防災週間は、常設の展示ブースと VR 防災体験の 2 つで構成された。
非常用持ち出し袋の展示コーナーでは、非常時に持ち出す物品をバッグに詰め込み、実際に背負って重さを体験してもらった。必要なものは何かを理解した上でのバッグの重さを体験することで、持ち出し袋の必要性と避難時の大変さをリアルに感じてもらえた。世界の防災の紹介のコーナーでは世界ではどのような防災が行われているのか理解することで、日本の置かれている状況について知り、防災について興味を持ってもらうきっかけづくりを行うことができた。VR 防災体験車は、VR を活用することで、参加者が体感に加えて視覚的にも地震をよりリアルに体験できるとあって昨年度同様、人気があった。多くの学生が参加してくれたため、学生の防災への関心向上に大きな効果があったといえる。

防災学習イベント

活動場所：青山学院大学　青山キャンパス
活動期間：2019 年 11 月 29 日（金）
活動人数：3 名（学生スタッフ 1 名＋一般学生 2 名）

【活動内容】
　防災週間に参加し、防災についてさらに知りたいと思った学生、および以前から防災について関心があった学生をターゲットとした「防災学習イベント」を防災の専門家を講師として招き開催した。「青山キャンパスにいる時に災害が起きた際、リーダーシップを取れる学生を育成する」という目標の下、災害時および災害後にリーダーシップを取る上で大切な基本知識や青学の中での課題を講師の方の専門的な意見や参加者同士の話し合いから学んだ。

【スタッフ所感】
　「防災週間」は台風被害が多い時期の開催（台風 19 号が接近中）であったため、台風被害に備えるために訪れた学生が見受けられた。避難する際に必要なものが「なぜ必要か」について、自然災害発生時をイメージしつつ具体的に参加者に説明できた。一方で「防災学習イベント」は避難者や帰宅困難者のために私たちができることについて深く考えることができた。拠点場所の決定が混乱を招く可能性があることや、限られた食料の配分方法など災害時の迅速な判断には正解がないことなど、新たな発見が多かった。

【今後の展望】
　来年度は、より多くの学生に「防災」に魅力を感じてもらい、参加してもらえるようなコンテンツを企画するなど内容を見直していきたい。

福祉プログラム（障がい者支援、環境啓発）

ガラクタアート展

活動場所：青山キャンパス 1 号館 1 階ラウンジ、9 号館ギャラリー
活動期間：2019 年 10 月 15 日（火）～ 10 月 17 日（木）
活動人数：8 名（学生スタッフ 5 名、一般学生 3 名）

【活動背景・活動内容】
　昨年度実施した学内でのニーズ調査により、青学生の渋谷のゴミ問題に対する関心が高いことが判明した。そのため、今年度の新たな試みとしてゴミ問題にフォーカスしたプログラムを実施した。
　頻繁に渋谷を利用する青学生への啓発活動として『ガラクタアート展』を学内で開催。青学生からゴミをテーマにしたアート作品を募集し 9 号館ギャラリーに展示した。1 号館ラウンジには渋谷のゴミに関するデータや、喫煙所のゴミやハロウィン翌日の渋谷センター街に溢れるゴミの写真を展示することでゴミ問題の現状を伝え、青学生が渋谷の街を「どんな街にしていきたいか」という理想の地域の在り方を考えてもらうためのコーナーを設置した。

【スタッフの所感】
　予想した作品数よりも応募は少なかったが、写真・書道・イラストなど個性的な作品が集まり、学生の目を引く展示にすることができた。作品を見た青学生から渋谷のごみ問題に対しての意見をもらい、青学生がゴミ問題をはじめ身近な地域の環境に対して関心をもつきっかけにできたと考える。

【参加者の所感】
　過去に何気なく撮影した自分の写真をたくさんの人に見てもらえて嬉しく感じた。作品を展示する場をもらえただけでなく、ゴミ問題というテーマで人にメッセージを発信できたことが自信に繋がった。

【今後の展望】
　環境問題へのアプローチにおいて、アートという手段が学生には伝わりづらいと感じた。作品に明確なメッセージを持たせた上で展示する方がより効果的だと学んだので次回に活かしたい。渋谷の環境に関わる外部団体と協力して活動することも視野に入れ、今後も環境問題へのアプローチを継続していくことを検討。

障害者週間

活動場所：青山キャンパス 1 号館 1 階ラウンジ（展示・障害ヒューマンライブラリー）、
　　短大別館 AX501 教室（ボッチャ体験講習会）
活動期間：2019 年 12 月 3 日（火）～ 12 月 7 日（土）
活動人数：ボッチャ体験講習会　　参加学生 4 名、学生スタッフ 6 名、
　　障害ヒューマンライブラリー　参加学生 4 名、学生スタッフ 6 名、

【活動背景・活動内容】
　本プログラムでは青学生に様々な障がいについて知ってもらうための活動として、ボランティアセンター主催事業と連動する形で 3 つの企画を実施した。
　企画の一つでは、知的障がいや身体障がい、発達障がいについて詳しく知ってもらうための常設展示を行った。展示ではパラリンピック競技の紹介も行い、青学生に障がいに対する知識を深めてもらうきっかけとした。
　二つ目の企画では、『ボッチャ体験講習会』として渋谷区教育委員会スポーツ振興課の方を講師としてお招きし、パラスポーツであるボッチャのルール説明や障害者スポーツの歴史、現状について解説していただき、その後、競技を体験することで楽しみながら障がい者スポーツを学ぶ活動となった。
　三つ目の『障害ヒューマンライブラリー』では、人を本に見立てて読者に貸し出す「ヒューマンライブラリー（HL）」という手法を用い、障がいのある方から人生のこと、仕事や暮らしのこと、普段感じていることや考えていることを対話形式で知り、交流する企画を行った。語り手＝「本」役として知的障がい、義手ユーザー、摂食障がい、聾者の方をお招きした。

【スタッフの所感】
　知的障がいだけでなくさまざまな障がいに目を向けたことで、地域にはさまざまな人が共に暮らしていて、互いに理解し合うことが重要であるという本プログラムが最も大切にしているテーマが多角的な視点から伝えられるようになった。『ボッチャ体験講習会』ではパラリンピックの歴史や競技体験を取り入れたことで、障がいがあるからスポーツができないのではなく、障がいがあってもできるスポーツを作ればよいというパラスポーツの根源的な理念を学ぶことにも繋がった。『障害ヒューマンライブラリー』ではただ参加学生が「本」の方の話を一方的に聞くだけでなく、お互

いに質問しあったり意見を交換しあえたことで、障害理解を深めるよい交流の場となっていた。

【参加者の所感】
・ボッチャが純粋に楽しく、本当に誰でもできて平等なスポーツだと感じた。普段の暮らしにおいても、障がいのない人の基準で物事を決めるからこそ障がいが「障害」になってしまうので、障がい者にあわせた配慮や環境が必要だと感じた。
・ヒューマンライブラリーという手法そのものを知らなかったが、自分の知らない世界が様々な方向に広がるよい場だと感じた。

【今後の展望】
　今回の参加者には障がいについて知ってもらうことができたが、依然として障がい福祉に対する学生の関心は全体的に薄いと感じる。来年度以降も障がい福祉に関わる活動を継続し、より多くの人に障がい者に対する偏見などの問題を捉えてもらえるよう伝達手段に工夫を凝らしたい。

食品ロスプログラム（啓発活動）

物販活動

活動場所：青山キャンパス 17 号館 1 階 中庭
活動期間：2019 年 7 月 1 日（月）～ 7 月 5 日（金）
活動人数：19 名（Roote 食品ロススタッフ 12 名、その他 Roote スタッフ 7 名）

【活動内容】
　企業から発生している食品ロスについての知識を普及に加え、実際に青学生に食品ロス削減に貢献してもらえることを目標に「食品ロスレスキュー」という題で物販活動を行なった。Otameshi という、食品ロスに関する商品を扱っているサイトから食品ロスとして捨てられる予定だった商品を購入し、青山キャンパスで 100 円で販売した。結果として延べ 70 名の学生が購入し、商品は完売した。利益 2806 円は発展途上国の給食支援を行っている「Tabele For Two」に寄付することで、わずかではあるが食の面から貧困問題にアプローチできたと考える。また、販売場所に展示コーナーを設けることで、訪れた人々により深い食品ロスに関する知識の提供をした。そのほかにも宣伝媒体に食品ロスに関する知識も掲載し、情報発信を行なった。

【スタッフ所感】
　食品ロスになりかけていた商品を販売し、青学生や大学関係の方々に購入して頂くことで、食品ロスの削減を実感するができた。物販を通して、青学生に、食品ロスを減らすためにできることは身近にあるということを提示できた。また物販を行なった際に、「食品ロス」という言葉を声に出して発信することで、食品ロスに対する注目を集められたと考える。食堂やナナカフェなどの、人目につきやすい場所に、食品ロスに関する情報を掲載した三角 POP やポスターを設置することで、食品ロスの現状について考えるきっかけを提供できたと思う。

【今後の展望】
　食品ロスに関する商品を購入して頂いた方々に行なったアンケートの結果から、100% の人が今後も削減に貢献したいと回答していたことや、このようなイベントで貢献するという意見があった。このことから、物販のような青学生が食品ロス削減のために参加できる企画は継続する意義があると考える。さらに、寄付という形ではあるが、食品ロスを活用することで、食料を求めている人々に届けることができ、食の需給バランスの矛盾の改善に貢献できると分かった。Roote では海外プログラムもあるため、そちらと連携し、直接支援を届ける形も検討していきたい。

小盛りカード

活動場所：相模原キャンパス G 棟 1 階　学食
活動期間：2019 年 10 月 7 日～継続中

【活動内容】
　相模原キャンパス G 棟 1 階の学食にご協力いただき、学食の券売機に「小盛りカード」を設置した。「小盛りカード」を利用することで、学食で提供される料理の白米の量を無料で半分に減らすことができる。学食で提供される食事の白米の量は 200 g であり、一般的な定食よりも多くなっている。そのため、食べ残しが発生し、食品ロスとなってしまうことがあった。今回「小盛りカード」を導入することにより、学食での食品ロスの削減を目指した。また、学食という学生に身近な場所で活動することで、青学生に食品ロスの問題について知ってもらい、食品ロスの削減に貢献してもらうことを目標とした。

【スタッフ所感】
　「小盛りカード」の設置により、食べ残しをするのではなく事前に減らすという行動を促し、学生が食品ロスの削減に気軽に貢献できる機会を提供できたように思う。実際には 14 日間で 244 枚、1 日約 17 枚の利用があり、一定のニーズはあったと考える。また、学生への食品ロスの認知度調査やポスター掲示により、より多くの学生に食品ロスの問題を知ってもらい、身近に感じてもらうことができたと考える。この取り組みを通して、より多くの学生に食品ロス問題の深刻さを伝え、自らの行動が削減につながるということを理解してもらいたい。

【今後の展望】
　小盛りカードは今後も継続して設置予定であるため、さらに多くの学生に利用してもらうことを期待する。しかし、中にはカードの仕組みを正しく理解していない学生も見られたため、広報等で改善していく必要がある。また、青山キャンパスのイチナナ食堂には、すでに昨年度小盛りカードを導入していたものの、今年度は設置のみで活用できなかった。このことを踏まえ、来年度は両キャ

ンパスで小盛りカードを活用した企画を立て、小盛りカードと食品ロス削減の関連性を学生に伝えていきたい。

ドギーバッグ普及活動

活動場所：青山キャンパス 17 号館 1 階イチナナ食堂
活動期間：2019 年 9 月～ 1 月

【活動内容】
　ドギーバッグとは一般的に欧米で普及し、飲食店で残してしまった食品を消費者自身が持ち帰るというシステムだ。日本での導入は衛生上の問題から課題があり普及していないが、これからの食品ロス問題において必要になってくると思い、今年度から活動を開始した。主にメンバー内でドギーバッグに関する情報を収集し、地域の飲食店とどのように関わることが良いのか考えてきた。また、青山キャンパス１７号館１階イチナナ食堂にて学生に向けてドギーバッグに関するアンケートを取り、フィードバックを行い、校内にポスターを掲示した。

【スタッフ所感】
　ドギーバッグはまだまだ認知度が低いものの、校内のアンケート調査では多くの肯定的な意見が寄せられ、学生がもったいないという意識を持っていることを確認できたと思う。実際に今回の普及活動によって青学生のドギーバッグに対する認知度を 13%から 27%まで上昇でき、一定の効果があったと考える。そのため、これからもっと認知度を上げて積極的に活動していきたいと感じた。

【今後の展望】
　今年度の活動では学外での活動を行うことが出来なかったため、来年度は地域の飲食店の方へコンタクトを取り、青山学院の学生や地域の方が利用できるように模索し実行に移していきたい。また、学内の活動もより充実させていきたいと思う。具体的には、ドギーバッグをもっと学生に知ってもらうためにイベントの開催などを目標にしていきたい。

難民プログラム（難民支援）

M4R プロジェクト

活動場所：青山キャンパス 17 号館 1 階学生食堂
活動期間：一週目 2019 年 11 月 6 日（水）～ 8 日（金）
　　二週目 2019 年 11 月 13 日（水）～ 15 日（金）
活動人数：6 人（学生スタッフ 6 人）
活動対象：学生食堂利用者（販売食数）310 名

【活動背景・目的】
　日本に逃れてきている人が多くいるにも関わらず、難民認定されている人が少ないこと、またそのことを含め難民問題を知らない日本人が多いという現状がある。青学内で行った事前調査によると、「日本にも難民が逃れてきていることを知っている」と答えた学生は 186 人中 96 人と 52% と過半数であったが、「難民問題に対して関心を持っている」と答えた学生は 40% にとどまった。このギャップに、難民問題について関心を持ってもらう必要性を見出せる。また調査で難民に対するイメージを聞いたところ、「かわいそう」という意見がある一方で、「テロ」「犯罪」「治安悪化に繋がりそう」という声も多かった。難民問題が日本社会で十分に知られていないため、難民への偏見・誤解が受け入れ体制に影響を与えている可能性がある。そのため、大学内で難民問題を「食」という身近なものを通して 10 代 20 代の若者に伝えることで、難民について少しでも知り、関心を持ってもらうことが改善に繋がっていくと考えた。

【活動内容】
　M4R（Meal for Refugees）の活動は、青山学院大学 17 号館学食にて、レシピ本「海を渡った故郷の味」から選んだ料理 2 種類を各 500 円で、11 月 6 ～ 8 日，13 ～ 15 日の二週間、各水木金（計 6 日間）に渡って販売するというものだ。売上のうち 20 円を難民支援協会に寄付した。それと同時に難民問題に関しての意識調査アンケートや、三角ポップを使った啓蒙活動も実施した。三角ポップでは、販売する料理の故郷について、その地の難民問題について、また現在の日本の難民認定制度の問題について記載した。

【スタッフ所感】
　今回の一連のプロジェクトの中で、青学生が実際に難民に対してどのように考えているのかを知れたことは大きな一歩であったと思う。問題解決のニーズも明らかになり、問題の深刻さについても再確認させられた。アンケートを取っている中でも興味がある人とない人の差も歴然としており課題解決の困難さを実感した。尚、今年度一年間は我々学生スタッフの準備期間でもあったため、様々な講演会に足を運んだり、東京入国管理センターを訪問したりと多くのことを学んできた。実際に現場に足を運ぶことで、今まで気づくことがなかった点に気づくことができたので、今後の活動でも現場に足を運ぶことを忘れず、大切にしていきたい。

【今後の展望】
　ターゲットを難民問題に関心を持つ学生に絞り、実際に難民の話を聞いたり訪問したりできる機会を提供する形にしていきたい。具体的には東京入国管理センター（品川）への訪問の機会、難民認定者、仮放免者の講演を提供できるようにしていきたい。次年度はより日本国内の難民問題に

フォーカスした企画にしていく。

インドネシアプログラム（環境活動）

ゴミの生まれ変わり～リサイクル～プロジェクト

活動場所：公立高校 SMAN28（インドネシア・バンテン州南タンゲラン）
活動期間：2019 年 8 月 19 日（水）～ 8 月 23 日（日）
活動人数：6 名（学生スタッフ 5 名・一般参加者 1 名）

【活動背景】
　インドネシアのゴミ問題は、行政によるゴミ回収システム・リサイクルシステムが発達していないことが大きな要因である。ゴミ処理のプロセスやリサイクルが国民の中に浸透していない。また昨年度に実施したゴミ回収・処理システム問題に関する活動では、ゴミの分別によりもたらされる利点や、リサイクルシステムに付いて知識が乏しい生徒が目立った。リサイクルをすることによって、ゴミの再利用が可能になり、私たちの生活に利益をもたらすことを知ってもらえば、更なる関心をもたらし、問題の改善に繋がると考える。

【活動内容】
【スタッフの所感】
　クラスが 1 年生と混ざったり、1 クラスの人数にばらつきがあったりと、当初の予定と異なる点もあったが総合的に目標を達成することができたと考える。生徒の知識の獲得と意識改善が目標であった。授業前と授業後にそれぞれ行ったアンケートで、格段に生徒のリサイクルに関する知識が向上したことがわかった。また、ディスカッションでは自分たちの学校が率先して活動を行い、ロールモデルになりたいという声も聞かれ、意識改善も成果が見られたように思う。日本や各国のリサイクル政策のセクションに興味をもった生徒数が一番多かったことも興味深かった。

【今後の展望】
　今年度の授業で活動先の生徒への知識普及、意識改善は効果が出たように思う。しかし、生徒達の意識は改善しても、国のゴミ回収のシステムが不十分であるために回収される時はゴミが全てひとまとめになって回収されるなど、自分たちの活動の限界を感じた。そのため、今後は今までの活動を続けつつ、インドネシア全体のゴミ制度の改善を図るための活動をしていきたいと考える。その活動の一貫として、インドネシアでゴミ回収をし、リサイクルを行う団体である Waste 4 Change と協力を考えている。また、スタッフ自体の知識を増やすため、実際にゴミ山の状況や、特に事態が深刻な地域への視察も考えている。

フィリピンプログラム（教育支援活動）

Roote フィリピン訪問プログラム

活動場所：フィリピン　カビテ州　ブリハン地区（現地視察）
　　大学構内（スポーツ用品寄付の回収）
活動期間:2019 年 8 月 6 日（火）～ 8 月 17 日（土）（現地視察）　11 月（スポーツ用品寄付の回収）
活動人数：8 名　（現地視察者 4 名）

【活動背景・活動目的】
　フィリピンにはまだまだ貧困にあえぐ子供達が多く、それがゆえに健全に成長する機会を奪われている。この現状を少しでも改善し、将来の国の担い手である子供達への教育支援を行うことを目的とした活動を行うことが今年度のゴールであった。現地視察では、活動に向けたカウンターパートとの関係づくりとニーズの確認を行った。

【活動内容】
①現地視察　（8 月）
　現地のニーズ把握やカウンターパートとの連携、プログラムとしての具体的な方向性などを正確に定めるため、8 月上旬にフィリピンのカビテ州にあるブリハン地区を訪問し、宗教法人カノッサ修道女会日本支部が当該地域で主催する VOICA プログラム（コミュニティでのアウトリーチ活動）への参加を通して視察を行った。
　12 日間の滞在では、未就学児と小学校低学年を対象とした栄養プログラムである炊き出し活動のお手伝いや、小学校に訪問して高学年の児童に折り紙を教える活動等を行った。特に多くの時間をかけた活動は子供達とのスポーツ交流・文化交流であった。私たちは、生活・学習環境が日本と比べると、一見劣っているように見受けられるブリハンの子供達が、質素ながらも幸福な生活を送っている様子に深く感銘を受けた。「貧困」について改めて考えさせられる貴重な経験となった。また、現地のニーズを確認し、活動のためのカウンターパートを見つけることができた。視察では、フィリピン全土のカノッサ修道女会を支援している NPO の Canossian Volunteers Philippines とブリハンカノッサセンター（Canossa Health Social Center Brgy）の職員の方々に大変お世話になった。帰国後は、視察で得た情報をもとに、学内の一般参加者生を募って春期に実施する現地活動に向けて準備を始めた。

②春期現地活動
　現地視察で見えたニーズを基に、秋以降はブリハン地区の子供達を対象とした 2 つのプロジェクトを企画した。主な内容はスポーツを通じた交流と文化交流だった。現地ではスポーツ用品が不足しており、それをめぐって子供達が争う場面などが多く見受けられたため、11 月に学内の体育会からボールなどの使用済みのスポーツ用品の寄付を募ることを計画し、協力団体から回収した。子供達が平等にスポーツできる機会を提供し、ルール作りを行うことによって協調性を学ぶことのできる機会を作ることを目的とした。また、スポーツが苦手な子供達が参加できる場も考慮し、折り紙などを一緒に行う文化交流を通じて、異文化に触れる楽しさなど、心の成長を目的とした活動を行うことを企画した。
　冬には、一緒にフィリピンで活動する一般参加者の募集に向けた広報・説明会・参加者希望者との面談など経て活動メンバーを確定し、2020 年 3 月 1 日から 8 日の日程で実施予定の現地活動に

向けたミーティングや事前学習を行った。しかし、2 月頃から各地で新型コロナウィルスの感染拡大が始まったことにより、安全面と現地への負担を考慮し、現地関係者との協議を重ねたうえで、2 月 12 日に、今春のフィリピン現地ツアーを中止するという苦渋の決断を下した。

【スタッフの所感】

このプログラムを通じて、現地の子供達により平等で、将来の可能性を広げる機会を提供することを強く望んでいた。また、事前学習を行うことによって、参加者全員に子供達をとりまく社会的な問題への意識をしっかりと持ってもらい、ひとり一人が現地での活動イメージを持って参加できる準備を進めることができたと考える。

3月に予定していた活動は、余儀なく中止される結果となったが、今回の悔しさと経験を糧として、来年度以降のプログラムの企画・実行に尽力する。また、フィリピン等、各地での新型肺炎による影響が一刻も早く収まることを心から祈る。

【今後の展望】

海外のプログラムは、現地での活動が実施することが出来ないとなった際には、プロジェクトの成果ほとんど出ないかたちになる点があり、プログラムの脆弱性を痛感した。今回の経験を活かし、4 月からは提携先との関係性や活動内容を今一度スタッフ全員で再考していきたい。

ネパールプログラム

【活動内容】

ネパールプログラムは例年 2 月上旬から 2 週間程度、現地に赴いて地域清掃や衛生教育といった活動を行なっている。しかしながら、今年度はプログラムメンバーの減少により、現地活動の企画を立てることができなかった。

【今後の展望】

来年度は新たなスタッフを迎えてネパールを訪れたいと考えている。新型コロナウイルスが猛威をふるう中、感染拡大の予防として手洗いの重要性が再認識されている。途上国で衛生管理を徹底するにはどうしたらいいか、といったテーマも企画に取り入れていけたらと考えている。

5. 資料

5.1 ボランティアセンター利用状況

2019 年度ボランティア参加者について（ボランティアセンター集計）

参加者とリピーター数

（単位：人）

延べ人数	409
参加人数	350
リピーター	45

参加カテゴリー

（単位：人）

ボランティア活動	131
ボラサポ	41
セミナー・講座・シンポジウム	235
教職員参加	2
総計	409

参加者の属性（所属学部等）と活動分野

（単位：人）

活動分野 属性	教育	国際協力	災害・ 復興支援	子ども 支援	福祉	地域	その他	総計
学部生	**15**	**85**	**73**	**24**	**89**	**9**	**52**	**347**
文	**2**	**26**	**13**		**27**	**2**	**9**	**79**
フランス文学		9	1		3			13
英米文学	2	15	2		16		5	40
史学		1	2		2	1	1	7
日本文学		1	7		4	1	2	15
比較芸術			1		2		1	4
教育人間科学	**12**		**5**	**9**	**7**		**3**	**36**
教育	12		4	8	5		2	31
心理			1	1	2		1	5
経済		**10**	**7**		**5**		**13**	**35**
経済		6	6		4		7	23
現代経済デザイン		4	1		1		6	12
法		**8**	**11**		**8**		**4**	**31**
法		8	11		8		4	31
経営		4	6	1	10	1	6	28
マーケティング				1	4		2	7
経営		4	6		6	1	4	21
国際政治経済	**1**	**12**	**14**	**4**	**9**		**14**	**54**
国際経済	1	2			2		2	7
国際政治		6	12	4	4		10	36
国際コミュニケーション		4	2		3		2	11
総合文化政策		**3**	**8**		**6**		**2**	**19**

	総合文化政策		3	8		6		2	19
	理工		**1**	**2**	**1**	**2**	**4**		**10**
	化学・生命科		1				4		5
	機械創造工			2	1				3
	電気電子工					1			1
	物理・数理					1			1
	社会情報		**1**	**2**		**5**	**1**		**9**
	社会情報		1	2		5	1		9
	地球社会共生		**20**	**5**	**2**	**6**	**1**		**34**
	地球社会共生		20	5	2	6	1		34
	コミュニティ人間科学				**7**	**4**		**1**	**12**
	コミュニティ人間科学				7	4		1	12
大学院生			**1**	**5**	**1**	**7**	**2**		**16**
	会計プロフェッション研究科		**1**						**1**
	会計プロフェッション専攻		1						1
	国際マネジメント研究科			**1**		**1**	**2**		**4**
	国際マネジメント専攻			1		1	2		4
	国際政治経済学研究科			**1**		**1**			**2**
	国際コミュニケーション専攻					1			1
	国際政治学専攻			1					1
	教育人間科学研究科					**3**			**3**
	教育学専攻					1			1
	心理学専攻					2			2
	経営学研究科					**1**			**1**
	経営学専攻					1			1
	経済学研究科			**1**					**1**
	経済学専攻			1					1
	理工学研究科			**2**	**1**	**1**			**4**
	理工学専攻			2	1	1			4
教員			**1**			**1**			**2**
	大学		1			1			2
職員			**4**	**7**		**30**		**1**	**42**
	本部					4			4
	大学		3	6		21		1	31
	短大			1		4			5
	高等部					1			1
	他大学		1						1
その他				**2**					**2**
	IVYCS			2					2
	総計	**15**	**91**	**87**	**25**	**127**	**11**	**53**	**409**

青山キャンパス集計

ボランティア情報取り扱い数

1. 団体登録件数

2019 年度　登録	30 団体

2. ボランティア等募集件数

ボランティア募集等総数

月別ボランティア等募集件数

（単位：件）

月	件数
4	51
5	64
6	55
7	39
8	32
9	46
10	46
11	38
12	37
1	38
2	41
3	49
合計	536

カテゴリー別ボランティア等募集件数

（単位：件）

カテゴリー	件数
ニュースレター	286
ボランティア募集	132
イベント	45
講座・セミナー	27
その他	26
助成金情報	11
シンポジウム	9
合計	536

3. 月別来場者数

	青学生		教職員		他大学生		一般		
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	**合計**
4 月	10	24	0	0	0	2	8	2	**46**
5 月	20	20	1	3	0	1	6	2	**53**
6 月	12	24	0	0	0	0	1	0	**37**
7 月	7	25	1	6	0	0	2	1	**42**
8 月	2	1	0	0	2	1	1	0	**7**
9 月	3	6	0	1	0	0	1	1	**12**
10 月	7	8	0	2	0	0	4	0	**21**
11 月	15	41	0	5	0	0	6	4	**71**
12 月	13	24	0	2	0	0	7	3	**49**
1 月	6	20	2	2	0	0	5	2	**37**
2 月	3	1	0	0	0	0	0	1	**5**
3 月	1	3	0	0	0	0	2	0	**6**
合計	99	197	4	21	2	4	43	16	**386**

4. 相談内容区分

	1 国内ボランティアについて	2 海外ボランティアについて	3 ボランティア保険について	4 組織運営・活動について	5 緊急支援	6 募金・寄付	7 フェアトレード	8 ソーシャルビジネス・BOP・CSR等	9 その他	**合計**
4月	5	2	1	1	0	0	0	0	2	**11**
5月	9	2	0	0	0	0	0	0	0	**11**
6月	2	0	0	0	0	0	0	0	1	**3**
7月	6	0	0	0	0	0	0	0	1	**7**
8月	1	0	0	1	0	0	0	0	2	**4**
9月	2	1	0	0	0	0	0	0	1	**4**
10月	4	1	0	0	0	1	0	0	1	**7**
11月	2	0	0	0	0	0	0	0	0	**2**
12月	0	1	0	0	0	2	0	0	0	**3**
1月	4	1	0	0	0	0	0	0	0	**5**
2月	1	0	0	0	0	0	0	0	0	**1**
3月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	**0**
合計	36	8	1	2	0	3	0	0	8	**58**

5. 主な相談内容

月	相談内容
4月	・学生ポータルで見たボランティアについて情報が欲しい
	・所属団体 (アイセック) とこどもテーブルで協力した事業をやってみたいがボラセンがどのように関わっているか知りたい
	・昨年度実施した TFT のドライフルーツ販売について、どのような手順で実施できるか。
	・ボラセンのこどもテーブル特設ページからの参加方法と流れを知りたい。また、動物関係のボランティアも興味がある。
	・ボランティアセンター掲示板に貼られていたボランティアに参加したい。
	・友達から誘われたショートフィルムフェスティバルのボランティアについて窓口となっている人 (団体) を知りたい。
	・ボランティア先より保険の加入指示があったため紹介が欲しい
	・東北の被災地について自分自身が学べるようなプログラムがあれば参加してみたい。昨年は Gakuvo のながぐつプロジェクト、ならはみらいのスタディツアーなどに参加した。
	・個人的に NPO でボランティアをしている。自作映画の上映を学内で行うことは可能か？
	・海外ボランティアに関する情報が欲しい。特に青学で主催するイベントに参加してみたい。
	・渋谷区「けやき教室」でボランティアしたい。
5月	・Roote や東北でのボランティア活動に興味がある。
	・海外での子どもの学習支援に興味がある。
	・渋谷区こどもテーブルに申し込んだ。他大学の友人も一緒に参加したいと考えているが可能か？
	・スポーツ・オリンピック関連のボランティアについて。その他、単発でやれるボランティアなら何でも知りたい。
	・就活がほぼ終わり、時間ができたのでボランティアしたい。カンボジアで活動したい。あと児童養護施設も。
	・単発で気軽にできるボランティア活動に参加してみたい。
	・掲示板のボランティア活動に興味がある。(NPO ROJE 学校ボランティアプロジェクト)

5 月	・ボランティアについて紹介してほしい。(こどもに興味あり)
	・夏休みに少し遠方でのボランティアに興味がある。子どもに勉強を教えるなど。
	・ボランティアサークル [TsunAGU] として学内で物販を行いたい。そのために必要な手続きを教えてほしい。
	・留学から帰って来て、時間があるので外国人に日本語を教えるボランティアをしてみたい。
6 月	・『夏体験ボラ』ガイダンス資料のみ受け取り希望。(6/13 は部活で参加できないため)
	・「夏の体験ボランティアキャンペーン」ガイダンスに参加できなかったため資料が欲しい。
	・Roote 福祉プログラムのガラクタアート展に興味がある。
7 月	・スポーツに関わるボランティアをしてみたい。
	・渋谷区の防災訓練に参加希望。
	・夏休みにできる子ども関係のボランティアを紹介してほしい。(渋谷区)
	・就活の面接に備えて、夏休みに何かボランティア活動をしてみたい。
	・公務員志望のため、自己アピールできるようボランティア活動してみたい。夏休みに参加できるプログラムがあれば知りたい。
	・ボランティア活動先での動画撮影等許可書類について。
8 月	・学生団体「きすあに」の活動について知りたい
	・青学内でのメンタルヘルスに関する活動を在学生と共にやりたい。
	・釧路市長が青学出身であることから、連携事業を行えないか模索している。他の自治体の事例やどんな連携の可能性があるか教えてほしい。
	・他大学生による青学内での活動に関して。
9 月	・ボランティアセンターの報告書 (フィリピンプログラム) を見て興味がある。他、どんな活動があるか。
	・気軽にできるボランティアをやってみたい。
	・夏に参加したプログラムの成果物をボラセンで展示してほしい。
10 月	・Roote がどのような団体か知りたい。
	・これまで何もボランティアしてこなかったが、就職活動を目前に何か参加してみたい。
	・春休み (2-3 月) に参加できる海外ボランティアを探している。
	・陸上部に所属しているが箱根駅伝の沿道ボランティアの募集に協力してほしい。
	・これまでボランティア活動したことないけど、何かやってみたい。
	・「箱根駅伝沿道ボランティア」に興味があるが団体でないと申し込みできないか？
	・台風被災地支援募金活動について。Roote、その他ボランティアサークルと合同でやりたい。
11 月	・韓国人留学生グループ 4 ～ 5 人。高齢者福祉施設でのボランティア活動を継続的に行いたい。
	・こどもテーブルについて・災害ボランティア活動について
12 月	・冬休み・春休みに参加できるような教育支援の海外ボランティアに参加してみたい。
	・洋服の寄付を受け入れているところを教えて欲しい。（学外の友人がバンドの物販 T シャツ等新品の余りの処分に困っている）
	・家にあった使用済文具を寄付する先を知りたい。
1 月	・非常勤講師で授業を持っている。社会福祉系のボランティア活動先は紹介してもらえるのか？
	・現在 4 年生だが海外ボランティア活動をしてみたい。卒業後でもボラセンを利用できるのか？
	・教育・震災関連のボランティアに興味がある
	・現在 2 年生。 3 年の前期までに何かできるボランティアはないか？
2 月	・児童福祉系のボランティアに興味がある。インターンを探したが、締切に間に合わなかった。VC 内の情報で自分に合うものがあれば通年で考えている。

相模原キャンパス集計

ボランティア情報取り扱い数

1. 団体登録件数

2019 年度　登録	12 団体

2. ボランティア等募集件数

ボランティア募集等総数

月別ボランティア等募集件数

（単位：件）

月	件数
4	14
5	15
6	17
7	20
8	6
9	12
10	9
11	8
12	5
1	15
2	19
3	7
合計	147

カテゴリー別ボランティア等募集件数

（単位：件）

カテゴリー	件数
ボランティア募集	86
ニュースレター	22
講座・セミナー	14
イベント	16
助成金情報	1
その他	8
合計	147

3. 月別来場者数

	青学生		教職員		他大学生		一般		
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	**合計**
4月	29	32	0	4	0	0	7	6	**78**
5月	37	32	9	1	0	0	1	4	**84**
6月	32	40	5	3	0	0	1	0	**81**
7月	32	29	3	0	0	0	11	8	**83**
8月	4	15	1	0	0	0	0	0	**20**
9月	8	6	3	1	0	0	0	0	**18**
10月	21	22	2	2	0	0	0	1	**48**
11月	19	15	4	3	0	0	1	3	**45**
12月	14	10	2	0	0	0	1	1	**28**
1月	6	6	0	0	0	0	0	0	**12**
2月	5	1	0	0	0	0	3	3	**12**
3月	3	2	0	0	0	0	2	0	**7**
合計	210	210	29	14	0	0	27	26	**516**

4. 相談内容区分

	1 国内ボランティアについて	2 海外ボランティアについて	3 ボランティア保険について	4 組織運営・活動について	5 緊急支援	6 募金・寄付	7 フェアトレード	8 ソーシャルビジネス・BOP・CSR等	9 その他	**合計**
4月	5	1	0	1	0	0	0	0	3	**10**
5月	8	0	0	5	0	0	0	0	7	**20**
6月	0	1	0	1	0	0	0	0	8	**10**
7月	2	1	0	0	0	0	0	0	2	**5**
8月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	**0**
9月	1	1	0	0	0	0	0	0	2	**4**
10月	1	0	0	3	2	0	0	0	7	**13**
11月	3	1	0	3	0	1	0	0	5	**13**
12月	2	1	0	2	0	0	0	0	2	**7**
1月	2	0	1	0	0	0	0	0	2	**5**
2月	0	0	0	0	0	0	0	0	3	**3**
3月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	**0**
合計	24	6	1	15	2	1	0	0	41	**90**

5. 主な相談内容

月	相談内容
4月	・不登校、学習支援、周辺地域の活動に興味あり
	・国際協力に興味あり
	・何かボランティアをしてみたいけど、何からしたら良いか
	・夏休みに何かボランティアをしてみたいが、どんなものがあるか。チラシが色々欲しい
	・SIVA が先導して夏にスポ GOMI やりたい。集合場所に使用できる広場情報、提供スポンサー探し方等色々教えてほしい。
	・ボラサポについての質問
5月	・ボラサポについての質問
	・夏休みに何かボランティアをしてみたいが、どんなものがあるか。
	・子ども食堂ちゃお！に行ってみたい。
	・fan × fun の組織が大きくなり、運営方法や、海外に活動に行く際の危機管理の方法
	・Roote 企画のプレゼン方法
	・車イスバスケ等障がい者スポーツのボランティアがやってみたい。（認知症ｻﾎﾟｰﾀｰ講座の受講時に相談あり）
	・アンリミテッドのイメージ PR ポスターをボランティアセンターで掲示・配布できないか？
	・ＳＬ面談日確定のお知らせ（活動日程は面談の日に決定する）
	・SIVA でﾊﾗﾙﾌｰﾄﾞやﾋﾞｰｶﾞﾝﾌｰﾄﾞを提供できるように学食とコラボしてみたいが、どこからどう話をしたら良いのかアドバイスが欲しい
	・ボラサポにゼミで出したい。スタートアップ・ステップアップで迷い中
	・相模原キャンパスのオープンキャンパスでボランティアサークルの紹介をさせてほしい。
	・アフリカヘリテージコミュニティのボランティア募集についての依頼 / 以前から参加している団体がボランティアを募集している。以前、青学生（ボランティア団体）が加わっていたが関係が途絶えてしまった。また、青学生のボランティアを募集したい。

5月	・ボランティア団体で色々講習会やイベントを行うのに、簡単な申請で学内の教室を貸してもらえないか？ ・時間も職員のいる 5 時まででではなく、もう少し遅くまで貸してもらえるようにはならないか？
6月	・ボラサポの応募条件など色々教えてほしい。(最近ボラサポのことを知り、説明会に間に合わなかった為) ・ボラサポに通らなくても、ボランティアセンターに来たら自分たちがやりたいボランティアの進め方・注意点などの相談にのってもらえるか？
	・ＳＬ活動日程の調整結果について（日程調整がつかず、3 回しか活動日を設定できない報告）
	・ゼミでモンゴルにボランティアに行くことを計画したが、資金難で困っている。何か助成金はないだろうか？
	・アイセックという団体に所属しているが、来年は春にボラセンが主催している合同説明会に参加したいが、どの様にしたら参加させてもらえるのか？
	・宮古ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑに興味あり
	・国際協力に興味あり。海外にボランティアに行こうと思ったら、安全な国・団体はどうやって選べば良いのか？
	・ボラサポの企画書の書き方等を教えてほしい
	・fan × fun で 7 月にイベントを行う竹の置き場に困っている。物品保管庫に変わるどこかないだろうか？
	・ボラサポの企画書を書いたので、見て意見を欲しい
	・相模原祭で今年もタイのコーヒーを紹介しながら販売したい。
7月	・こどもの居場所セミナーを青山学院ボランティアセンターと相模原社協と一緒に開催したい。
	・淵野辺銀河まつり、今年も出店しませんか？
	・自分が参加しているボランティア団体 (CFF) の活動に青学生のボランティアを募集したい。
	・ボラサポ、スタートアップを始めるにあたって
	・相模原市精神保健福祉センター主催のバリアフリーフェスティバルに青学生のボランティア募集をお願いしたい。
9月	・ボランティア団体に関して、NPO･NGO などの学生活動への参加、インターンシップ（3 か月以内）等を検討中 ・また、近日の千葉での災害や東北地方への支援にも学生で参加が可能なものがあれば教えてほしい。
	・ボラサポの精算・記入方法をチェックしてほしい。
	・JICA に応募しようと思っているので、応募用紙の記入について相談にのって欲しい。
	・海外での動物保護のボランティア団体を探している。どこか紹介してほしい。
10月	・相模原祭で食に関する映画上映を行うが、どう集客して良いか分からない。アドバイスを欲しい。
	・ボラサポ　タイコーヒープロジェクト。タイに行ってきた報告を今後の活動について
	・災害ボランティア経験はないが、今週末にでも千葉のボランティアに行きたいと思ってる。紹介してほしい。
	・前日に色色々提案したことに対しての経過報告とチラシ完成版の引き渡し
	・外国人対象の国内ボランティアについて（夏期にカナダへ留学へ行った経験から、国際系の活動に興味を持った。しかし、資金不足の為、海外渡航は難しい。2 月頃に短期間のボランティアがあれば検討したい）
	・学生サポートセンターへの助成金申請について（学生ボランティア団体 fan × fun の活動を後押しすべく 10 月 15 日 (火) までに学生サポートセンターへ助成金の申請をしようとしているので、大学担当者の推薦書が欲しい）
	・学生サポートセンターへの助成金申請について（申請書の書き方の指導をお願いします）
	・相模原祭が台風で中止になってしまったので、違う形でコーヒーの販売を考えている。

10 月	・相模原祭が台風で中止になってしまったので映画上映を違う形で青学で実施したい。どの様な方法があるかアドバイスを欲しい。
	・台風 19 号のボランティアについて（10 月 20 日 (日) に栃木市で活動を予定）
	・相模原祭が台風で中止になってしまったので、タイコーヒーについて広める機会・方法をどうしたらよいか。
	・新図書館開館に向けて学生ボランティアの検討 / 青山に新しく建てられる図書館の開館に向けて、利用学生を増やす取り組みを両キャンパスで検討中。こうしたコンテンツづくり等、ボランティアで学生に取り組んでもらうにはどうしたら良いか。アルバイトを雇用するには制度を設けるなど難しい。継続性をもったり、コアになるメンバーが必要。
	・台風でボランティア先の BIG イベントがなくなった。この先、ボランティア先とのかかわり方を迷い中
11 月	・AISEC 相模原の代表が挨拶。今後のボラセンの合同説明会等に参加させて欲しい。
	・相模原祭が中止になってから、他の形での映画上映会の実施を検討したが、留学が目前に迫っている為、実施困難と判断。留学から戻ってから、再度実施方法を検討すると報告を受ける。
	・TsunAGU ボランティア愛好会、相模原でも青山のように食堂とコラボして開発したメニューを販売したい。どこからどのように話をしたらよいだろうか？
	・国境なき医師団のイベントのチラシ掲示をお願いしたい
	・JICA への進路について
	・AISEC　相模原でのメンバー集めについてのボラセン企画とその時期を教えて欲しい。ボラセン前の活動紹介写真の仲間に入れて欲しい。等、相模原で AISEC の認知度を上げるための手段を模索中
	・今回のボラセン企画の災害ボランティアには予定が合わない為行けず、説明会にも参加できないが、今後ボランティア活動をしようと思っている為、どの様な活動なのか詳細を聞いておきたかった。
	・災害ボランティアに興味あり。他にも 12 月にボランティア出来るような案件はないか？
	・青年海外協力隊の 2 次試験の対策について
12 月	・コミュニティ人間の授業（地域社会調査法入門 1）に関わっての情報収集（「車いす・話すことにも少しサポートが必要な学生」が淵野辺で一人暮らしをしながら青山学院に通うとしたら、学内及び学外でどんなサポートが必要か、また自分たちにできることはどんなことがあるか、実際に調査したい。 ・今週が障がい者週間で、ボランティアセンターで色々とイベントをやっていると聞いてきた。
	・自分が活動している NPO 法人 CFF の春休みプログラムの説明会を行う予定。その案内をポータルで流して欲しい。
	・自分が活動している NPO 法人 CFF の春休みプログラムの説明会を行う予定。その為の教室を貸して欲しい。(青山でも可)
	・ボラサポのタイコーヒープロジェクト（購買会とコラボしてコーヒーの販売をする予定だったが、難しくなったため、パネル展示・アンケート回答してくれた方にコーヒーをプレゼントということにした。実施するためのアドバイスが欲しい）
	・NPO 法人 SET　まちおこし実践ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑの宣伝に関する相談
1 月	・1 月 17 日 ~Gakuvo の災害ボランティアに行くことが決まったため、保険の加入方法を教えて欲しい。
	・ふるさとふくしまワーキングホリデーに興味あり
	・ボラサポの精算について
	・渋谷区子どもテーブルに興味あり。申込みたいが、うまくいかない。
2 月	・奨学金申請の為、2018 年に参加した大野銀河祭りの活動証明書が欲しい。
	・JICA への進路が決まった報告
	・サービスラーニングでお世話になった団体に授業終了後もずっと関わり続け、その報告

5.2 ボランティアセンター規則

（2016 年 11 月 24 日理事会承認）
改正　2018 年 1 月 25 日　 2018 年 6 月 18 日
2019 年 3 月 28 日　 2019 年 12 月 13 日

（趣旨）
第 1 条　この規則は、青山学院大学学則第 58 条の 3 第 2 項の規定に基づき、青山学院大学ボランティアセンター（以下「センター」という。）の運営について必要な事項を定めるものとする。
[青山学院大学学則第 58 条の 3 第 2 項]

（センターの目的）
第 2 条　センターは、本学におけるサービス・ラーニングとしてのボランティア活動の支援を通じて、学生、職員が社会貢献活動を体験することにより自らの学びがより豊かなものとなるよう、それらの者の自発的な社会活動への参加を促すとともに、社会の様々なコミュニティが抱える課題の解決に取り組み、社会貢献活動に積極的に関わることができるサーバント・リーダーを社会へ輩出することを目的とする。

（センターの事業）
第 3 条　センターは、前条の目的を達成するため、次の事業を行う。
（1）　センターの目的を達成するための調査及び企画立案
（2）　ボランティア活動企画に関する情報収集及び管理
（3）　ボランティア活動への参画機会の提供
（4）　ボランティア活動の実施促進
（5）　ボランティア活動に参画する学生、団体の能力強化
（6）　ボランティア活動に関する学内外の専門家及び関連団体との連携の促進
（7）　ボランティア活動の社会的及び教育的効果の評価と勧告
（8）　ボランティア活動をめぐる社会的価値の創出と発信
（9）　ボランティア活動及び市民社会の活性化のための調査研究
（10）　前各号に規定するもののほか、センターの目的達成に必要な事業

（本部及び分室）
第 4 条　センターは、青山キャンパスに本部を置く。
2　センターは、前条に規定する事業のうち相模原キャンパスに係るものを行うため、同キャンパスに分室を置く。

（センターの組織）
第 5 条　センターにセンター長 1 名を置く。
2　センターに副センター長 1 名を置く。
3　センターにボランティアコーディネーター若干名を置く。
4　センターに助手若干名を置く。
5　センターの運営等に係る重要事項を審議するため、センターにボランティアセンター運営委員会（以下「運営委員会」という。）を置く。

6　センターの運営等に必要な事項を検討するため、運営委員会の下にボランティアセンター実務委員会（以下「実務委員会」という。）を置く。

（センター長）

第 6 条　センター長は、センターの業務を統括し、センターを代表する。

2　センター長は、学長が本学専任教員の中から候補者を推薦し、運営委員会及び学部長会の審議を経て、学長が委嘱する。

3　センター長の任期は、2 年とする。ただし、前任者が任期の途中で退任した場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

4　センター長は、再任されることができる。

（副センター長）

第 7 条　副センター長は、センター長を補佐し、センター長に事故あるときは、その職務を代理する。

2　前項に規定するもののほか、センター長が、必要があると認める場合は、副センター長にその職務の一部を臨時に代理させることができる。

3　副センター長は、センター長が本学専任教員の中から候補者を推薦し、運営委員会及び学部長会の審議を経て、学長が委嘱する。

4　副センター長の任期は、2 年とする。ただし、前任者が任期の途中で退任した場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

5　副センター長は、再任されることができる。

（ボランティアコーディネーター）

第 8 条　ボランティアコーディネーターは、ボランティア活動に係る専門知識を有する学校法人青山学院（以下「本法人」という。）の専任の職員又は当該職員以外の者（以下「外部の専門家」という。）をもって充てる。

2　ボランティアコーディネーターの職務は、次のとおりとする。

(1)　ボランティア活動に係る情報収集及びその発信に係る支援

(2)　ボランティア活動の機会提供に係る支援

(3)　ボランティア活動の実施に当たっての外部組織の紹介及び当該外部機関との調整

(4)　ボランティア活動に係る学習機会の提供に係る支援

(5)　ボランティア活動における相談に対する対応

(6)　学生スタッフへの指導及び助言

(7)　ボランティア活動に係るプログラム開発及びその支援

(8)　ボランティア活動における本学と外部機関との連携に係る支援

(9)　ボランティア活動に係る本学と外部機関とのネットワーク構築及びその支援

(10)　ボランティア活動に係る記録及び統計資料の作成及びその支援

(11)　前各号に規定するもののほか、センター長がセンターの目的を達成するために必要があると認めた業務

3　ボランティアコーディネーターは、センター長が候補者を推薦し、運営委員会の審議を経て、学長が委嘱する。

4　ボランティアコーディネーターの任期は、1 年とする。ただし、前任者が任期の途中で退任した場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

5　前項の規定にかかわらず、センター長が特に必要と認める場合は、1 年未満の任期を定めることができる。

6　第４項の規定にかかわらず、センターの助手がボランティアコーディネーターとなる場合の任期は、当該助手としての在職期間とする。
7　ボランティアコーディネーターは、再任されることができる。
8　第１項の規定により、外部の専門家をボランティアコーディネーターとして委嘱した場合は、学校法人青山学院謝礼等の支給基準に関する内規の定めにより、報酬・謝礼を支給することができる。
[学校法人青山学院謝礼等の支給基準に関する内規]

（センター助手）
第９条　センターの助手（以下「センター助手」という。）は、学校法人青山学院助手に関する就業規則（以下「助手に関する就業規則」という。）の定めるところにより雇用され、センターに所属する本学の専任教員とする。
[学校法人青山学院助手に関する就業規則（以下「助手に関する就業規則」という。)]

（センター助手の職務）
第 10 条　助手に関する就業規則第４条第３項の規定によるセンター助手の職務は、同条第１項に規定するものに加えて、次のとおりとする。
[助手に関する就業規則第４条第３項] [助手に関する就業規則第４条第１項]
（1）　第３条に規定するセンター事業に係る業務
[第３条]
（2）　前号に規定するもののほか、センター長が必要と認めた業務

（センター助手の資格）
第 11 条　センター助手は、助手に関する就業規則第５条第１項の規定により、青山学院大学専任教員の任用及び昇任に関する規則第２条第５項各号のいずれかに該当するものでなければならない。
[助手に関する就業規則第５条第１項] [青山学院大学専任教員の任用及び昇任に関する規則第２条第５項]
2　前項に規定するもののほか、助手に関する就業規則第５条第２項の規定によるセンター助手の資格は、ボランティア活動に係る専門的知識を有する者とする。
[助手規則第５条第２項]

（センター助手の雇用手続）
第 12 条　センター助手の雇用は、次項から第４項までの規定による。
2　センター長は、センター助手の候補者の雇用が適当であると認めたときは運営委員会の審議を経て、学長に、センター長による推薦状及び当該候補者の経歴、業績等が明記された書類その他必要と認められる書類を添えて、その候補者の雇用を発議する。
3　学長は、前項の規定による発議を適当と判断したときは、学部長会にこれを付議する。
4　候補者の雇用の決定は、前項の規定により学部長会の審議を経た後、常務委員会及び常務理事会で協議し、理事会の承認を得なければならない。

（センター助手の雇用契約の契約期間等）
第 13 条　センター助手の雇用契約の契約期間、待遇、勤務等については、助手に関する就業規則の定めるところによる。

（運営委員会の構成）

第 14 条　運営委員会は、次の委員をもって構成する。

(1)　センター長

(2)　副センター長

(3)　大学宗教部長

(4)　ボランティアコーディネーター

(5)　本学の職員の中からセンター長が指名する者　若干名

(6)　事務局長

(7)　学生生活部長

(8)　政策・企画部長

(9)　学務部長

(10)　相模原事務部長

2　センター長は、必要があると認める場合は、前項各号に規定する委員に加えて、外部の専門家若干名を委員として委嘱することができる。

3　前項及び第 1 項第 5 号に規定する委員の任期は、1 年とする。ただし、前任者が任期の途中で退任した場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

4　前項の委員は、再任されることができる。

5　運営委員会に委員長 1 名を置き、第 1 項第 1 号に規定する委員をもってこれに充てる。

（運営委員会の招集、開催、表決数等）

第 15 条　運営委員会は、委員長が招集し、議長となる。

2　運営委員会は、年 2 回以上定期的に開催する。ただし、委員長が必要と認めたときは、随時開催することができる。

3　運営委員会の開催は、委員の 3 分の 2 以上の出席を必要とする。この場合において、運営委員会で審議する事項につき、書面をもってあらかじめ意思を表示した者は、出席者とみなす。

4　運営委員会の議決は、出席した委員の過半数の賛成を必要とする。

5　委員長は、必要があると認める場合は、委員以外の者を列席させ、意見を聴くことができる。

（運営委員会の招集、開催、表決数等）

第 15 条　運営委員会は、委員長が招集し、議長となる。

2　運営委員会は、年 2 回以上定期的に開催する。ただし、委員長が必要と認めたときは、随時開催することができる。

3　運営委員会の開催は、委員の 3 分の 2 以上の出席を必要とする。この場合において、運営委員会で審議する事項につき、書面をもってあらかじめ意思を表示した者は、出席者とみなす。

4　運営委員会の議決は、出席した委員の過半数の賛成を必要とする。

5　委員長は、必要があると認める場合は、委員以外の者を列席させ、意見を聴くことができる。

（運営委員会の審議事項）

第 16 条　運営委員会は、次の事項を審議する。

(1)　センターの運営等に係る基本方針に関すること。

(2)　センターの予算及び決算に関すること。

(3)　センター長、副センター長及びセンター助手の人事に関すること。

(4)　ボランティアコーディネーターの委嘱、任期等に関すること。

(5)　前各号に規定するもののほか、実務委員会から付議されたこと。

（実務委員会の構成及び開催）

第 17 条　実務委員会は、次の委員をもって構成する。

(1)　センター長

(2)　副センター長

(3)　ボランティアコーディネーター

(4)　学生生活部から　若干名

(5)　学務部教務課から　若干名

(6)　国際部国際交流課から　若干名

(7)　相模原事務部から　若干名

(8)　本学の職員の中からセンター長が指名する者　若干名

(9)　学生スタッフの代表

2　センター長は、必要があると認める場合は、前項各号の委員に加えて、外部の専門家若干名を委員として委嘱することができる。

3　第 1 項第 4 号から第 9 号までに規定する委員の任期は、1 年とする。ただし、前任者が任期の途中で退任した場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

4　前項の委員は、再任されることができる。

5　実務委員会は、センター長が必要に応じて招集し、議長となる。

6　センター長は、必要があると認める場合は、委員以外の者を列席させ、意見を聴くことができる。

（実務委員会の業務）

第 18 条　実務委員会は、次の事項について協議し、その執行に当たる。

(1)　センターの事業計画等に関すること。

(2)　センターが行うボランティア活動に係る企画、立案及び実施に関すること。

(3)　外部の組織及び機関との連携に関すること。

(4)　センターの予算の執行に関すること。

(5)　学生スタッフに関すること。

(6)　前各号に規定するもののほか、センターの運営等に必要なこと。

2　センター長は、必要があると認める場合は、前項の規定による協議の結果を、運営委員会に報告する。

（学生スタッフ）

第19条　センター長は、必要があると認める場合は、センターに学生スタッフを置くことができる。

2　学生スタッフは、実務委員会の委員の指示により、センターの活動に係る補佐業務に当たる。

3　前項の補佐業務は、無償とする。

4　学生スタッフは、本学の学部又は大学院研究科に在籍する学生で、センターの活動への参加を希望する者の中から、センター長が任命する。

（所管）

第 20 条　この規則は、学生生活部が所管する。

2　センターの運営等に係る事務は、学生生活部学生生活課及び相模原事務部学生生活課が所管する。

（改廃手続）

第 21 条　この規則の改廃は、運営委員会及び学部長会の意見を聴いた後、常務委員会で協議し、理事会の承認を得て、学長がこれを行う。

附　則

この規則は、2016 年 11 月 25 日から施行し、2016 年 10 月 1 日から適用する。

附　則（2018 年 1 月 25 日）

この規則は、2018 年 4 月 1 日から施行する。

附　則（2018 年 6 月 18 日）

この規則は、2018 年 6 月 19 日から施行し、2018 年 4 月 1 日から適用する。

附　則 (2019 年 3 月 28 日)

この規則は、2019 年 4 月 1 日から施行する。

附　則 (2019 年 12 月 13 日)

この規則は、2019 年 12 月 14 日から施行する。

5.3 ボランティアセンタースタッフ一覧

2019 年度ボランティアセンター運営委員会委員

センター長（委員長）	鈴木　眞理　教授
副センター長	高橋　良輔　教授
大学宗教部長	塩谷　直也　教授
ボランティアコーディネーター	佐藤　亜希
	秋元　みどり
	三神　憲一
	島﨑　由宇
	中尾　匠吾
事務局長	馬場　俊和
学生生活部長	内山　吉嗣
政策・企画部長	白濱　哲郎（～ 2019.5.31）
	金子　絹子（2019.6.1 ～）
学務部長	立花　愼一
相模原事務部長	原　　啓

2019 年度ボランティアセンター実務委員会 委員

センター長（委員長）	鈴木　眞理　教授
副センター長	高橋　良輔　教授
ボランティアコーディネーター	佐藤　亜希
	秋元　みどり
	三神　憲一
	島﨑　由宇
	中尾　匠吾
学生生活部学生生活課	斉藤　恭子
学生生活部スポーツ支援課	芦田　太郎
学務部教務課	茨田　英智
学務部国際交流課	瀧澤　雄河（2019.6.1 ～国際部国際交流課）
相模原事務部（学生生活課）	松本　宏美
（学務課）	古幡　晃一
学生スタッフ代表	ヤマウチ　恵凜（国際政治経済学部国際政治学科）

事務所管

学生生活部学生生活課（青山キャンパス）	中尾　匠吾
	藤枝　彩香
	宮下　悠
相模原事務部（相模原キャンパス）	松本　宏美

学生スタッフ

マネジメントチーム

代表	ヤマウチ 恵凜
副代表	吉年 由加里
	菅田 十和子
	堀内 秀平
会計	岡本 凌翼

所属プログラム

インドネシア	フィリピン	難民	食品ロス	福祉
落合 ありさ	荘 禮陽	寺田 瑠衣	渡邊 菜摘	堀内 秀平
ヤマウチ 恵凜	塚田 美咲	佐藤 桃子	菅田 十和子	荒嶋 万理奈
中村 真子	佐々木 梓乃	平尾 桃子	齋藤 桃佳	谷 茉奈美
川杉 麻衣	柳原 果歩	西尾 和恵	野呂 郁翔	田中 杏花
笹田 まどか	小田 佳祐	荒谷 与音	中村 壮吾	丸山 ちはる
北村 晴喜	盛定 栄珠	小田 佳祐（兼）	水留 悠里	近江 悠
	日置 ちひろ		鈴木 伶実	橋本 大吾
	榮浪 健悟		弓野 妃香莉	
	横川 茉里絵		松本 晃一	
			鈴木 七海	
			岡 成美	
			田中 亜果利	
熊本	ネパール	陸前高田	防災	
岡本 凌翼	富山 もな	真船 絵里	高橋 幸智	吉田 知貴
吉年 由加里		水田 瑛吉	水野 麻里衣	菅野 葉月
竹内 ゆきの			吉本 雅	浅里 玲
定由 諒				磯崎 諒介
安蒜 紗希				
在本 茉由				
小林 直輝				
茂島 大志				
佐久間 泰誠				

5.4 ボランティアセンターを支えてくださった皆様

（順不同・敬称略）

【提携・協力団体】

東京都社会福祉協議会　東京ボランティア・市民活動センター
渋谷区社会福祉協議会
しぶやボランティアセンター
東京都生活文化局
渋谷区危機管理対策部防災課
警視庁渋谷区警察署
東京消防庁渋谷消防署
株式会社ＩＶＹＣＳ
秋田県仙北市
秋田県仙北市教育委員会
岡山県総社市
岡山県総社市教育委員会
宮城県塩竈市
宮城県塩竈市教育委員会
陸前高田ドライビングスクール
社会福祉法人燦々会あすなろホーム
二又復興交流センター
陸前高田市ボランティアサークル「ぜんしん」
南阿蘇村役場
阿蘇復興への道
阿蘇健康農園
久永屋
株式会社ジャパンブランドマーケティング
一般社団法人みなみあそ観光局
一般社団法人九州学び舎
NPO 法人阿蘇エコファーマーズセンター
一般社団法人ならはみらい
日本財団学生ボランティアセンター
独立行政法人国立青少年教育振興機構
災害救援ボランティア推進委員会
相模原市社会福祉協議会
株式会社ミライロ
公益財団法人笹川平和財団
全国キャラバン・メイト協議会
日本サービス・ラーニング・ネットワーク
NPO 法人横浜 NGO ネットワーク
NPO 法人地球市民 ACT かながわ
NPO 法人 WE21 ジャパン相模原
コトラボ合同会社

多文化学習活動センター（CEMLA）
認定 NPO 法人八王子つばめ塾
子ども食堂ちゃお！
NPO 法人アクションポート横浜
NPO 法人びーのびーの
ジャカルタお掃除クラブ (JOC)
カノッサ修道女会
NPO 法人難民支援協会

【寄付・助成をいただいた皆様】
青山学院大学後援会
青山学院校友会
青山学院校友会大学支部
東日本復興支援コンサート
缶バッチ募金プロジェクトメンバー
一般財団法人学生サポートセンター

【その他、お世話になった皆様】
浦戸諸島各地区の皆さま
宮城県塩竈市立第三小学校
宮城県塩竈市立杉の入小学校
株式会社渡會
木ノ内農園
はな阿蘇美
ポートランド州立大学パブリックサービス研究実践センター
Collaborative Schools Networks
DHURMUS SUNTALI FOUNDATION
消費者庁消費者政策課
Otameshi
NPO 法人 TABLE FOR TWO International
渋谷区教育委員会 スポーツ振興課

Aoyama Gakuin University Volunteer Center

発行日：2020 年 7 月 31 日
発行者：青山学院大学ボランティアセンター